

日本醫史學雜誌

第13卷 第1号

昭和42年2月10日発行

原 著

ドイツ医学採用についてのフルベッキの証言と

その時代的背景……………安芸 基雄…(1)

禅僧鈴木正三の唱えた医者 of 倫理観……………杉田 暉道…(34)

吉川宗元宛前野良沢書状と

石川大浪筆ヒポクラテス像……………片桐 一男…(38)

白鳥雄蔵種痘書について

—中川五郎治の種痘法に関連して—……………松木 明知…(54)

雜誌文籍……………(63)

例会記事……………(61)

通 卷 第 1367 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2~1

順天堂大学医学部医史学教授室内

振替口座・東京15250番

「ドイツ医学採用に関するフルベツキの証言と
その時代的背景」

虎の門病院神経科

安 芸 基 雄

THE TESTIMONY OF G. F. VERBECK AS TO THE ADOPTION OF
THE GERMAN MEDICINE AT THE BEGINNING OF THE MEIJI ERA,
AND ITS HISTORICAL BACKGROUND.

Motoo Aki, M. D.

Department of Neuropsychiatry
Toranomon Hospital

目 次

一、緒 言

二、フルベツキ証言の事情

三、フルベツキ人とその時代

① フルベツキとドイツアメリカとの関係

② 明治政府の宗教政策

③ フルベツキとその弟子達（明治政府の好遇とその裏面）

四、ベルツの辞職と日本医学批判

五、明治天皇と東京帝国大学（聖諭記の教訓）

六、結 語

一、緒言

先般来日して日本の医学教育について調査した John Z. Bowers によれば、日本の医学教育は臨床より著しく研究に偏している点に特徴があり、また第二次世界大戦以後の急激なアメリカからの影響にも拘わらず、明治以来の長い伝統に根本的な変化はなく、依然としてドイツ流の哲学乃至は組織によって教育が行なわれているという。

明治以降、日本の近代医学形成の上にドイツ医学が及ぼした影響については既に周知の所であり、今更多言を要しない。しかし同時に、今日日本の医学が直面している多くの混乱と困難を克服するためには、ドイツ医学採用当時の事情を改めて考察し、その後代に及ぼした影響を歴史的に理解することは根本的に重要である。その第一歩として、明治初年におけるドイツ医学採用の事情、特にフルベッキ証言の時代的背景について、ここに小論を試みる所以である。

二、フルベッキ証言の事情

徳川末期にオランダ医学が輸入され、次第に勢力を得て、在来の漢方医学と対抗するに至ったこと、たまたま維新前後の内乱の際、我が国の医師に外科に習熟せる者殆んどなく、当時薩長の討幕勢力を支援したイギリス公使 Harry Smith

- ① John Z. Bowers: 'Medical Education in Japan', p. 45, Harper and Row, N. Y., 1965 彼は同書中にて若く日本人医師七六二名に対して行ったアンケートの結果を報告しているが(同書一四七—一五九頁)、その中で全く無宗教の者は七九・九パーセントに達すること、また「もしすべてを初めからやりなおすことが出来るとしたら、もう一度医学校に入るか。」という問いに対し「否」と答えたものが四八・七パーセントに達することは注目される。以下本論で扱う明治政府の特に宗教政策の無思想性無理想性はこうした所にも蔭を残しているのではあるまいか。

Parkes の仲介により、イギリス公使館付医官 William Willis^② が討幕側に従軍して創傷の治療を行ない、信望を集ためると、のち横浜の大病院が医学校と合併されると、この Willis が招かれて教師となったこと、等はよく知られた事柄であるが、このままで推移すれば、オランダ医学はイギリス医学に置換えられるのが自然の勢であった。これをくつがえしてドイツ医学採用の転機を作ったのは、医学取調御用掛相良知安と岩佐純の奔走の結果であるが、当時 Willis は既に(東京)医学校に教師として在職し、政府にも少なからざる功勞あり、声望高く、殊に知学事山内豊信(容堂、前高知藩主)と親交あり、之を俄かに罷免することは非常に困難な事情にあった。百方苦慮した相良が、当時(東京)開成所教師たりしフルベッキに意見を求め、その証言に基づいて遂にドイツ医学採用となる経過は、すでに周知の所であろう。

しかしこの際フルベッキの証言が、どの程度の重要性を持っていたかについては、実は若干の疑点がある。即ち当事者相良知安の意見として伝えられる所によると、「医学を独逸学に為したるは固より時の政府当事者の意志に出でたるもの」であった。^③ 相良自筆の建白書においても、何らフルベッキにふれる所はない。つまり公式にはフルベッキの証言にふれた記録は見当らず、大学南校にハイスクールを建設するに際し、フルベッキ自身の建白書(明治五年)が提出されているのとは、明らかに事情を異にしているのである。

ここで二三の医学史書から当時の記事を借りてみよう。

② ウィリスは患者に対しては、此上なく優しい医師である一方、その個人的関係や職務の遂行に際しては、責任感の強い実直無比の人物であり、患者を救うためには、敢然として自分の身を危険にさらすことをいとわなかった。坂田精一訳、「アーネスト・サトウ」一外交官の見た明治維新」上、三二、六一頁、岩波文庫、昭和三九年。

③ 「明治元年六月、旧幕府建設ノ医学所ヲ以テ医学校トナシ……」^④「二年正月、英医ウエリスヲ教師トシ、岩佐純、相良知安ヲ医学取調御用掛トナス。……十二月、医学校ヲ大学東校ト改称ス。英人ウエリス期滿テ校ヲ去ル」文部省第一年報、明治六年。日本科学史学会編、「日本科学技術史大系」第八卷、七四頁、第一法規出版株式会社、昭和三十三年。

④ 「東京帝国大学五十年史」上、三七七—三七八頁、昭和七年。

⑤ 同書、上、三七四—三七五頁。

⑥ 同書、上、二四五—二四八頁。

⑦ 富士川游曰く、「是に於て東京大病院を昌平坂大学に隸して大学東校と改称し……フルベツキの説に本づきて学則の範を独逸に採る事に決し、教師を独逸国に聘するの議整ひ……。」

記す所最も簡單である。

⑧ 田中香涯曰く、「当時は前述の如く英米二国を以て文明国と固信し、何もかも之に範を取らんとした時代であつたから、独逸医学輸入説に反対する学者や官吏も多かつたが、然るに当時和蘭の生れで米国に帰化したウエルベツキと云へる公平な外国人があつて現今の世界中、医学の最も進歩せるものは独逸であると明言し、当時の大官に之を説き、また一面には副島種臣が国体上の関係から共和国の学風を排しどこまでも立憲君主国の学風を輸入せねばならぬといふ持論であつたので独逸医学輸入説に賛成を表した結果、遂に明治三年二月に至て政府は愈々独逸より医学者を大学東校に招聘することに決定し……。」

ここにはフルベツキが公平な外国人と評価されていたこと、また副島種臣が国体上の関係からドイツ医学採用に賛成したことが指摘されている。

最近の史書においては、

⑦ 富士川游、「日本医学史」七三二頁・昭和十六年。

⑧ 田中香涯「明治大正日本医学史」二三頁、昭和二年。

⑨ フルベツキが米国に帰化したというのは明らかに誤りである。当時和蘭では五年以上海外にある者は戸籍面より除く規定があり、フルベツキはこの為和蘭国籍を失っていた。また米国では在住三年に及べば帰化願をなすことが出来、その五年目に至れば許可されるにも拘らず、その手続きをしなかつたために在米八年に及んだのにフルベツキは何れの国籍をも持つに至らず、そのまま渡日した。佐波亘、「植村正久とその時代」、第一巻、二九八頁、教文館、昭和十二年。この無国籍であるという事実も、彼が公平であるという印象を与える上に、若干の意味を持ったと考えられる。

⑩ 「日本学技術史大系」、第二四卷、一三三頁・昭和四十年。

ら、我々の方で愈々独逸流で行かうとするには、先づ以つて此のウリース氏を医学校から退かせる方法を講じなくてはなりません。是が為には私共は随分頭をいたためたもので、相良氏の如きは遂に大学別当山内容堂侯と激論に及び、伸違ひを生じたと言はれました。

此際私共が目を附けたのに、当時政府の顧問ともいふべきフルベツキといふ人がありました。是は元和蘭の工兵大尉で、武官を止めて米国に移り、宣教師となり、後に挙げられて特に日本へ派遣されたので、先年長崎に居つて傍ら有志者の需めによつて万国公法（国際法）などを講義して居ましたが、大隈副島などの人々が、其門下に学ばれたのでした。今や是等の人々が参議になつて政局に當るに至つたのですし、フルベツキ氏も東京に聘せられ、駿河台に居を占め、明治政府の顧問で、種々の調査などを依頼され、相当勢力を持つて居ましたので、相良氏は一日此のフルベツキ氏を訪うて、我々は今我国医学を改正する職務に居る者であるが、先生は歐洲の事情に精通せらるゝから一体医学は何れの国が一番進んで居るかを承りたい、と資したのです。之に対するフルベツキの答としては、今日医学としては独逸が宜しい、その独逸でも何処が一番宜しいかと言へば、普魯西が宜しいとの明答を得たので、大いに我意を得たりと、相良氏は言下に、然らば其事を書いて頂き度い、と申して一片の証言書をもらひ、それから政府要路の人々に会ひ、今日西洋医学は独逸が一番進歩して居る、此事は独り我々のみの意見ではなく、已にフルベツキ氏も此の如く証言し居りますと説き廻り、其趣旨の建白書も提出しました。幸に之が採用されて我々独逸派の主張が貫徹する事になつたのです。

当時当路の有司中、第一番に私共の味方になつて呉れたのは、副島種臣伯^⑭でありました。同伯は国体の上からして、米国の如き民主国は全然我国と相容れないものであるといふ觀念を抱かれ、従つて一般文化も米国に採る事は反対で、万事は立憲君主たる独逸に倣ふがよいといふ強硬な主張を有つて居られたやうであつたので、私は一日伯を訪ひ、

⑮ ウイリスの処分は当面最大の難関であつた。相良は麾下の長谷川泰、石黒忠憲等と肝胆を砕いて、一時はウイリスの授業妨害まで敢てしたと伝えられる。「長谷川泰先生小伝」二七—三一頁、昭和十年。

⑯ 副島種臣は明治二年七月八日より明治四年七月十四日まで参議の職にあつた。

此際、我医学發展に關しては是非とも独逸医学を採用する様御尽力をお願い致し度いと請ひ援助を得ることとなりまし
た。」

医道改正御用掛であつた岩佐純は福井の人、思慮周密で温順な為人、反之相良相安は佐賀^①の人、見識も高いが自信も強
く、談論風発、氣骨稜々とした圭角ある論客であつたというが、此の相良が山内容堂と仲違いするまで激論したとして
も、それだけですでに牢固たる英学の勢力をくつがえすことが出来たかどうかは、頗る疑問である。やはり副島種臣、大
隈重信らの国体論によつて、ようやくドイツ医学採用にまで情勢を改めることが出来たというのが真相ではあるまいか、
相良は翌明治三年、信頼せる部下の官金私消の罪に勘問の筋ありとして、弾正台に拘留されるのであるが、その原因につ
き富士川游は次の如く述べている。

「相良先生が拘留セラレタル理由ハ不明デアルガ……相良先生が独逸医学ヲ採用スルノ議アリタルトキニ、大学別当山

①7 大隈重信、副島種臣はともに佐賀藩士、相良と同じ出身であつた。

①8 石黒忠恵、前掲書、一二八一—一二九頁。

①9 富士川游「相良知安先生、ソノ第三十回忌辰ニ際シテ」中外医事新報、第一二二八号、一五三一—一六六頁、昭和十年。

②0 容堂山内豊信（前高知藩主）が知学事の職にあつたのは明治元年十二月十三日より同二年四月二十日までと、明治二年五月十五
日より同年七月八日までの二回である。相良との面談はこの二回目の任期中と察せられる。相良が山容と意見衝突し、激論一夜に
して決せず帰つた後、中一日置いて突然山内の大学別当を免ずという辞令が下り、全く寝耳に水で世間ではその真相が分らなかつ
たというが（「長谷川泰先生小伝」三〇頁）、これも少し真実ならば、相良山内の面談は七月六日頃となる。

なほ官吏の風紀取締を目的として弾正台が設けられたのは明治二年五月二十三日であるが、山内はその設置にはげしく反対した
ばかりでなく、けたはずれの豪遊ふりは些かも衰えず、遂に七月四日には山内と、そのよい相手であつた副知学事秋月種樹（日向
高鍋藩主世子）に対し、弾正台より糾弾伺書が政府に提出されるに至つた。しかし秋月にはきびしく解職を要求しながら、山内
は譴責か戒告程度で片づけようとした趣旨は何の故であろうか。結局山内は弾正台の監察のわずらはしさを避け、病氣を理由に辞
職したのだとも言はれるが、真相は不明である（平尾道雄、前掲書、二三七—二三九頁）。何れにせよ、相良と衝突した直後の出
来事であつたために、相良が土州人の増悪を招くこととなつたというのが当時の一般の解釈だつたようである。

内容堂侯ノ意見ニ反対シテ、閉口セシメタノガ根ニナリテ、当時弾正台ニハ土佐ノ出身者ガ多く、ソノ主山内容堂侯ノ意ヲ迎ヘテ相良先生ヲ苦シメタノデアルトモ噂セラレタトイフコトデアル」

弾正台は一種の秘密警察であり、山内容堂は寧ろその設置に反対であり、彼自身も亦弾正台からの指弾を受けたことがある程で、富士川も一つの噂として伝えた事柄を無条件で受入れることは出来ないが、裏面に何らかの政治的事情が介在していたことは恐らく確実であろう。とすれば、ドイツ医学採用が単なる学問的問題としてではなく、一つの政治的問題として処理された事情は、十分考察に値する問題であると思われる。

三、フルベッキ、人とその時代

(一)フルベッキとドイツアメリカとの関係

順序として、第一にドイツ医学の優秀性を証言したフルベッキは如何なる人物であり、また彼のドイツ医学に関する知識は如何にして得られたのであろうか、という問題について、答えなければならぬ。

フルベッキ Guido Fridolin Verbeck は一八三〇年オランダのザイストに生れた。オランダは地理的にドイツと境を接し、極めて近いのみならず、日本の蘭学者がドイツ科学の隆盛に氣附いたのが、蘭書の多くがドイツ原書の翻譯であったという事実に基づいていることを想起すれば、両者の内面的文化的交流については茲に多言を費やすまでもないであろう。フルベッキは成人して Utrecht の工業学校 Polytechnic Institute において工学を修めたが、その修学の期間を通

②① 時の弾正台長は有名な土州人河野利鎌で、相良は彼がその肉を喰うも猶ほ慊らざる仇敵であったというが（長谷川泰先生小伝、三二二頁、三三二頁）、史実の程は明らかでない。

②② 平尾道雄、前掲書、二二六—二四一頁。

②③ 小川鼎三、「フルベッキ小伝」日本医史学雑誌、第一〇卷第二、三号、四九—五五頁 昭和三十九年。

してドイツの影響を身にしみて感ずることは十分可能であったと考えねばならない。

ドイツの新しい近代的科学は、まづ偉大な数学者ガウス K. F. Gauß (一七七七一—一八五五) から始まり、十九世紀以降の物理学の数学的基礎はドイツ人の手によって築かれ、やがて十九世紀の三十年代より八十年代にかけ、ドイツ科学の輝かしい隆盛の時期を迎える。有機化学の父リービヒ F. Liebig (一八〇三—一八七三年) の活躍もこの時代であり、近代的衛生学をうんだベッテンコーファー M. v. Pettenkofer (一八一八年—一九〇一年)、或は近代生理学の開拓者ヨハンネス・ミュラー Johannes P. Müller (一八〇一—一八五八年)、細胞病理学の祖ファイルヒョー R. Virchow (一八二一—一九〇二年)、何れもこの時代のドイツ学者であったことを見れば、その事情は容易に理解されよう。

更に母国を離れてから、一八五九年まで凡そ七年間滞在したアメリカは、ドイツ科学の影響を国を挙げて受入れている時期に相当したのであって、フルベッキはアメリカにおいても、ドイツ科学勃興の勢いを直接間接に見る機会を十分に持ったと考えられる。例えばアメリカの有数な大学の一つであるミシガン大学の一八〇五年(明治三十八年) 度卒業式における演説の中で、ジェイムス・エインジェル総長は、アメリカの学者並びに大学生が尊重すべき学問の理想について語り、それが過去五十年の間に重大な変化を受けたことについて注意を喚起したが、その中でもとりわけドイツの大学がアメリカの文化に与えた影響が最も大きかったことをはっきりと述べているのである。

ドイツの大学では勿論すぐれた専門的知識を授けたが、ただそれだけでドイツの大学の名声がアメリカに広まった訳では決してなかった。ドイツの大学に学ぶアメリカの学生たちの心を惹きつけ、学問に対する情熱をかきたてたのは、ドイツの大学が独創的な研究によって、「真理のための真理」を追求することに重きを置いていたからである。真理を探究し発見せんが為には、狭い限られた学問的分野を深く掘り上げることが必要であると同時に、またある限度内の事実につい

②④ 滝口直太郎他訳、「カーチ著、アメリカ社会文化史」下、九七一—一〇四頁法政大学出版社、昭和三十三年。

エインジェル James Burrill Angell (一八二九—一九一六年) はアメリカの教育者にして外交官。一九〇九年シカゴ大学を退いてから外交官として中国及びトルコに駐在した。

ては、教育の自由と学問の自由がひろく保証されねばならない。かくしてはじめて人間は、疑うべからざる真理とあがめられて、迷信から解放されることも可能となる。これがドイツにおける学問の理想であった。理性に基づく自由探求の精神 *Libertas philosophandi* は大学の原理であり、アカデミア (学術協会) *Academia* の精神であった。

しかもこの精神の発祥地ドイツにおいては、大学発達の歴史的条件から大学と国家との結びつきが強く、後年いつしか大学に自由を認めながらその自治は認めないという政治的な情勢が生れ、遂には大学は君主と直結せしめられるに至る。これに対し、アメリカにおいては、既に一七七六年の所謂「独立宣言」²⁴⁾によって政治的な自由を獲得し、更に「国家と教会との分離」(所謂政教分離)の問題に端を発して歐洲の他の諸国よりも「信教自由」の運動が早く発達し、一七八六年(天明六年)には世界にさきがけて「Virginia 信教自由法」²⁵⁾が結実し、これらの基盤の上に更に一九世紀後半、特に科学の分野においてドイツより「学問の自由」の精神を摂取して、政治、宗教のみならず思想学問及び言論の自由は、

²⁴⁾ 島田雄次郎「ヨーロッパの大学」一二三頁、至文堂、昭和三十九年。

²⁵⁾ 「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の尊いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求の含まれることを信ずる。またこれらの権利を確保するために人類のあいだに政府が組織されたこと、そしてその正当な権力は被治者の同意に由来するものであることを信ずる。そしていかなる政治の形体といえども、もしこれらの目的を毀損するものとなった場合には、人民はそれを改廃し、かれらの安全と幸福とをたらすべしとみとめられたる主義を基礎とし、また権限の機構をもつ新たな政府を組織する権利を有することを信ずる。」高木八尺他編、「人権宣言集」一一四頁、岩波文庫、昭和三十二年。嘗ては植民地たりしアジアの新興国の人民もまた、同じ宣言を自らのものとして繰返す権利がある。

²⁷⁾ 「全能の神は、人の心を自由なものとして創り給うた。何人も、宗教的礼拝に参列し、宗教的場所を訪れ、または教職者に経済的支援を与えることを強制されない。何人も、その宗教上の見解または信仰の故をもって、強制、制限、妨害を加えられ、または身体ないし財産に負担を課され、その他いっさいの困苦を与えられることはない。すべて人は、宗教についての各自の見解を表明し、これを弁護支持する自由を有する。また何人も、その宗教上の見解の故に、その市民としての資格に、減少増大その他の変更を加えられることはない。」高木八尺他編、前掲書、一一八—一九頁。

広く社会一般の通念として受入れられることとなった。

フルベツキが見たアメリカは、植民地より出発した新興の独立国としてなお多くの矛盾を衷に秘めながらも、右の如き意味においては正しくドイツを嗣ぐものであったと思われる。かくして「一体医学は何れの国が一番進んでいるか」との問に對し、自らの祖国オランダと言わず、第二の祖国アメリカと言わず、直ちにドイツを指したフルベツキの証言は、今日においても極めて公正妥当な印象を与えるのである。

(三) 明治政府の宗教政策

次にフルベツキが本来はプロテスタントの伝道者として日本に來たという事實は、決して輕視されてはならない。

一八五八年（安政五年）六月日米通商条約が調印され、函館の他、神奈川（横浜）、長崎、新潟、及び兵庫が開港場と定められた。この機会に、アメリカプロテスタントの一派であるオランダ改革派 Dutch Reformed Church of America は日本人に布教する目的で三人の牧師を日本へ派遣することを決定した。当時いやくも宣教師として日本に派遣されるべきものは、米本国の教会が選り得る最善の人物、その信仰においても學識においても第一流の人物たるを要するとされていたことは十分記憶さるべき事^{②⑤}実であつて、その三人の中の一人がフルベツキであつたのである。

しかも彼が初めて長崎の土を踏んだ一八五九年（安政六年）の日本は、彼の帯びた公けの使命を真向からはばむかの如く、未だに切支丹邪宗門禁制の高札の立ち並ぶ日本であつた。

そして約九年の後には明治維新となるのであるが、この時においても切支丹禁制は強められこそすれ、弱められる気配は些かもなかつたのである。

徳川幕府から大政を奉還された明治政府が進歩と保守の両面を持っていたことは、よく言われる所であるが、「五ヶ条の誓文」と日を同じくして、^{②⑥}五枚の太政官立札（「五榜の掲示」）が建てられ、その中で江戸徳川幕府以来の徒党、強訴、

②⑤ 黒木五郎、「梅光女学院史」、七一―八頁下段、梅光学院、昭和九年。

②⑥ 大久保利謙編、「近代史史料」、五三一―五四頁、吉川弘文館、昭和四十年。

逃散の禁がそのまま引継がれた点は注意せねばならない。そして宗教問題、特に切支丹問題に関しても明らかに保守的行動であつて、幕府がその末期に、情勢上止むを得ず踏込んだ切支丹解禁の方向から全く逆行して、明治元年王政復古、祭政一致を唱え、神道国教的政策を採用して、前記太政官立札の中で改めて切支丹禁制を高々と掲示したのである。即ち、「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ若不審ナル者有之ハ其筋之役所へ可申出御褒美可被下事」(明治元年三月)とある如くである。更に明治二年(一八六九年)には極端な攘夷主義者の沢主水正が、長崎裁判所総督として浦上の信徒を捕え、老若男女三千余人を諸藩に配流した。これは当時重大な外交問題ともなつた事実である。^⑩

文明開化をうたつた明治新政府のこれらの所業は、一体如何なる理由に基づくのであろうか。

蓋し「アジアの古代社会に起源を有し、かつて最高の政治権力であつた王朝勢力は、封建主義の成長とともにその勢力失」^⑪つて、「徳川時代には僅か十万石(公卿の所領をも併せて)の一封建領主たるに過ぎ」なかつた。しかも明治維新によって成立した新政府は、徳川幕府という旧政治的支配形態の崩壊、転化、解消に乗じて姿をあらわしたとはいへ、本質的にはその再編制であり、継承であり、之を新しい絶対主義権力として確立する為には、すでに一封建領主たるに過ぎなかつた天皇を、改めて神として一般人民の上に定着する操作が、どうしても必要であつたのである。地租改正、廃藩置縣等の重要な政治経済上の問題はさておき、明治初期の政府の宗教政策につき、しばらく触れてみなければならぬ所以である。

明治二三年帝国憲法發布以後のことは省くとすれば、それまでを概ね三期にわかつことが出来よう。

^⑫ 中村尚美「大隈重信」、四四―五〇頁、吉川弘文館、昭和三十六年。この際大隈は外国事務局の一判事でありながら政府代表に選ばれ、外国公使団との談判でイギリス公使パークスと論争して譲らず、彼の明治政府への足がかりを築くこととなつた。アーネスト・サトウもこの時の大隈について述べている。坂田精一訳、前掲書、下一九七―一九八頁。

^⑬ 羽仁五郎、「明治維新史研究」一四六頁、岩波書店、昭和三十一年。

^⑭ 羽仁五郎、前掲書、一六三頁。

^⑮ 小沢三郎、「日本プロテスタント史研究」、一二七―一三一頁、東海大学出版会、昭和四十年。

第一期、明治元年より明治五年まで。これは神道国教的政策を中心とする時期である。

明治新政府は誕生後間もなく王政復古祭政一致神祇崇拜を施政のスローガンとして打出したが、その思想的骨格は、岩倉具視の顧問たる国学者王松操等の建策により捉えられ、王政復古とはそのまま、神武の昔にかえることを具体的内容とした。即ち仏教儒教渡来以前に戻すことよって神道を復興し在来の神仏混濁にも終止符を打とうとする意図が含まれており、それは神仏分離、ひいては所謂廢仏毀釈という實際行動として現われた。即ち、絶対主義権力に対する強い批判力闘争力を秘めているキリスト教を引続き弾圧し、切支丹禁制を強化する一方では、在来の幕藩体制と結合する所深い寺院の権力を奪い、これを天皇制政権力と結びつく神社の手に移しかえようとしたのである。天皇を玉と呼び、玉を抱けば官軍、玉を奪われれば賊軍、玉を争って一芝居打とうとした低俗卑屈な政治意識から、今度は俄かに身を起し威儀を正して、明治元年には古制にのっとり神祇官を再興し、明治二年には宣教使を設けて惟神の道を以て国民の教化を開始し、封建倫理を天皇制倫理として再編成しようとしたのである。当時仏教は長年の幕府の無謀な宗教政策の結果もあって、すでに史家をして慨歎せしめる程に腐敗墮落しており、効果的な反撃はなし得べくもなかったが、それでも社家と寺僧との紛争衝突は全国到る処に起り、素朴な民心も動揺し、一揆的要素まで混入して、政府の方針も何ら一貫せるものなく、一部真実なる仏教家の奔走もあって、遂に当初の仏教圧迫をゆるめるに至るのである。

第二期、明治五年より明治一七年まで。これは国民教化的政策を中心とする時期である。即ち遂に在来の仏教圧迫の方針をゆるめた政府は、敬天愛国、天理神道、皇上奉戴等、天皇中心主義、皇道主義に違反せざる限りにおいて僧侶にも路

③④ 辻善之助、「日本文化史」第七卷、四五―五四頁、春秋社、昭和三十六年。

③⑤ 此度王政復古神武創業の始に被_レ為_レ基諸事御一新、祭政一致之御制度に御回復_レ遊候に付ては、先第一神祇官再興御造立の上追々諸祭典も可_レ被_レ為_レ興儀、被_レ仰出_レ候。(太政官布告、明治元年三月十三日)

③⑥ 遠山茂樹、「明治維新」二一〇頁、岩波全書、昭和二十六年。

③⑦ 辻善之助「日本仏教史之研究、統編」、五八三―六一頁、金港堂、昭和六年。

③⑧ 辻善之助「日本仏教史之研究、統編」六六一―七五七頁。

をひらき、新たに教導職を設けて、僧侶と神官とをひとしく任用した。神道自体思想として極めて内容に乏しいことは、すでに指摘されている如くであるが、この神道に支えられた皇道主義が国民教化の上に如何なる役割を果したかは、改めて史家の論議にゆだねたいと思う。しかしこの間明治五年六月、葬儀に關し重大な太政官布告の出されている事實は指摘しておかねばならない。これは自葬を禁止し、葬儀は必ず神官僧侶に依頼すべきことを定めたもので、明治六年切支丹禁制が解かれた後も、明治一七年に至るまでキリスト教による葬儀が法的に禁止されていたことは、やはり注目に値する事實と見なければならぬ。

なお明治六年にはじめて切支丹禁制の高札が取払われるが、これも内外の圧力によるもので、キリスト教を正しい宗教と認めたためではなく、また信教の自由が、近代国家における基本的人権の一つであることを理解したためでもなかった。

「自今諸布告御發令毎ニ人民熟知ノ為メ凡三十日間便宜ノ地ニ於テ令揭示候事但管下へ布達ノ儀ハ是迄ノ通可取計從來高札面ノ儀ハ一般熟知ノ事ニ付向後取除キ可申事」

即ち姉崎正治の如く、「内に向つて既に知れ亘つてゐる事であるから必要がないとの負け惜しみの弁解を附し、切支丹禁制の高札を撤去して之を各国公使に通知した。」のであって、極めて公明を欠く前近代的な黙認の形に終始したのである。辻善之助「日本文化史」、第七卷、一六五—一七三頁。明治の神道は、当局が之を以て国民的宗教として弘めんと努めたに拘らず、内容的には淺薄であり、權威に乏しく、一般思想界とは何らの交渉をももち得なかつた。また国民一般の宗教意識は低劣幼稚であり、政府施策の欠陥と相俟つて多くの俗信仰が盛となつた。

④0 明治五年六月二十八日、太政官布告、第一九二号、「近来自葬取行候者モ有之哉ニ相聞候処向後不相成候条葬儀ハ神官僧侶ノ内へ可相頼候事。」小沢三郎、前掲書一四九頁。

④1 法令全書、六四頁（明治六年）。小沢三郎、前掲書、一一九頁。

④2 高札撤去の事情については、佐波亘編「植村正久とその時代」第二卷三一七—三三四頁、教文館（昭和十三年）参照。明治四年海外視察に出た岩倉具視大久保利通らは、特に歐洲に於ては、切支丹迫害に対するはげしい非難攻撃に直面した。

④3 姉崎正治「切支丹禁制の終末」一八〇—一八一頁、同文館、大正十五年。

る。

この間、明治一〇年の西南の役は新政府の勝利に終ったが、政治的経済的には少なからぬ負担を後に残し、次第にたかまる自由民権運動を、政府は明治一四年の政変によって辛うじて切抜ける。しかしこの頃より政府の反動的政策は天皇制強化の線に沿って次第に具体化されてゆくこととなるのである。

第三期、明治一七年より明治二二年まで。政教分離的政策を中心とした時期である。

この時期においては、政府（特に岩倉具視らの周到な献策）によって、天皇の経済的基盤も次第に確立し、教導職は廃止されて国民教化的政策は消滅するが、天皇と神道との固い結び付きもすでに出来上っており、政局もやや安定して、明治二三年の帝国憲法発布に移行し、ここに見掛けだけの政教分離が行われることとなるのである。

以上を通過して、当時の政治家の宗教観の低俗さは一部の例外を除き余りにも印象的である。彼らにあっては、宗教は政治の道具の一つに過ぎず、嘗て玉を争ったのと同じ意識を以て、同じ玉を神道によって磨き、一つの絶対的権力に仕上

④ 「然レバ憲法ノカヲ保ツガ為メニハ其實質即チ皇室ノ財産ヲ富^か臆^たニシテ陸海軍ノ経費等ハ悉皆皇室財産ノ歳入ヲ以テ支弁スルニ足ル可ラシムヘシ。此ノ如クニシテ後ニ国会ニ於テ如何ナル過激論ノ起ルコトアリトモ又国库ノ経費ヲ議定セサルコトアリトモ之ヲ鎮撫シ之ヲ和順セシムルニ於テ何カ有ラン。故ニ大権ノ鈞石ヲ失ハサラント欲セハ国民ノ財産ト皇室ノ財産トヲシテ大差等ナカラシムルニ在リ。……乃チ今ノ官有地ヲ一括シテ皇室ノ財産トシ……皇室ノ財産ヲ定ムルハ実ニ今日、憲法制定ノ前ノ急務ナリ。……宜ク今日人民未ダ官有地ノ事ニ論議ヲ挿マサルノ時ニ於テ……以其事務ヲ憲法制定ノ前ニ整頓ス可シ……。岩倉具視の皇室財産に関する意見書・明治十五年二月。大久保利謙編・前掲書、二二〇—二二二頁。

なほ日清戦争の際も、三億六千四百万円という膨大な清国賠償金の八四、五パーセントは軍事費に投入されるが、その残余より二千万円が明治三十一年度皇室御料に編入され、これにより皇室財産は一挙に倍加した（黒田久太、「天皇家の財産」六一—六三頁、三一書房、昭和四十一年）。当時政府はすでに新たな戦争を期しての軍備拡張に重点を置き、明治二十九年、三十二年と前後二回にわたる大増税を行ない、その総額七五五九万円、実に戦前の租税収入の総額と匹敵する巨額であった（岩波講座、「日本歴史」第一七巻、一六五頁・昭和三十七年）。この急増する軍事費とそれに基づく重税の下で、議会は易々として賠償金献上を議決し、天皇は之を嘉納して皇室財産は増加の一途を辿るのである。

げようとしたにすぎないのである。これが明治維新の時代的背景の一面であり、我々の持つ思想的断層の一部である。かくて成立した絶対的君主権こそ、明治維新以来政府が示した宗教政策の論理的帰結であって、憲法それ自体もこの君権確立を意図したものに他ならなかった。この事情を、明治二年の憲法制定会議における演説で伊藤博文は次のように述べている。

「抑歐洲に於ては憲法政治の萌せる事千余年、独り人民の此制度に習熟せるのみならず、又た宗教なる者ありて之が機軸を爲し、深く人心に浸潤して人心此に帰一せり、然るに我國に在ては宗教なる者其力微弱にして一も國家の機軸たるべきものなし。仏教一たび隆盛の勢を張り、上下の人心を繋ぎたるも、今日に至ては已に衰替に傾きたり。神道は祖宗の遺訓に基づき之を祖述すと雖も、宗教として人心を帰向せしむるの力に乏し。我國に在て機軸とすべきは独り皇室あるのみ。是を以て此憲法草案に於ては専ら意を此点に用ひ、君権を尊重して成るべく之を束縛せざらん事を勉めたり」更に翌明治二二年、伊藤は府県会議長に対する演説^④において、この裏面の真情を吐露している。

「然れども将来如何の事変に遭遇するも、日本に於ては開關以来の国体に基き、上元首の位を保ち、決して主権の民衆に移らざることを希望して止まざるなり」

ここに伊藤博文、ひいては明治政府の基本的な意図をはっきりと見ることが出来る。その上で改めてフルベッキの仕事を振り返ってみることにしよう。

(三) フルベッキとその弟子達（明治政府の好遇とその裏面）

既に述べた如く、フルベッキが長崎に上陸した安政六年一月七日は、勿論切支丹禁制の時代であり、公式の伝道は許さるべくもなかった。自ら日本語を学び、また希望者に個人的に英語を教えながら時を待つこと四年、文久三年（一八六三年）たまたま長崎奉行が外国語を教える為の学校（済美館）をつくり、彼は招かれて校長として英語を教えることとな

④ 春敏公追頌会編「伊藤博文伝」中巻、六一五—六一六頁、統正社、昭和十五年。

⑤ 「伊藤博文伝」中巻、六五六頁。

った。各地より来り学んだ生徒は百人以上に及び、その中に小松帯刀、西郷吉之助、後藤象次郎、大隈重信、副島種臣、江藤新平ら、明治の政客の名を見ることが出来る。その弟子達の一部は後年新政府の中にあつて活躍し、フルベツキを東京に呼ぶ機縁を作るのである。

しかし此の長崎滞在中にも、フルベツキは彼の本来の使命たる布教伝道を全く放棄してしまつていたのではない。禁教下の日本においてはそれはどちらにとつても文字通り一身の安否をかけての勇気を要する仕事であつたと思われるが、慶応二年（一八六六年）に佐賀藩の家老村田若狭守にひそかに彼は洗礼^④を授け、また明治元年にも彼に日本語を教えた若い僧侶にひそかに洗礼を授けている。この若い僧侶は明治二年フルベツキが東京に去つた後捕えられ、切支丹の名の故に五年間獄中であつた。これが清水宮内という人物であつたことは、小沢三郎の考証に詳しい。当時の役人はキリスト教に対し、御制禁なるが故に常に目を光らせており、殊に宣教師の家に出入する日本人に対しては、監視の目はきびしかった。清水も周到な探索の後に捕えられたのである。宣教師に対しては勿論のことであるが、同じ監視の目は、時の政府に招かれて上京した後のフルベツキのあとをも執拗に追つていたのである。

当時切支丹に対する不信警戒の念は社会一般にしみわたつており、フルベツキの雇入れについても、当時外国官副知事であり後参与となつた東久世通禧^{ヒガシキセミチト}は、大隈重信に手紙を送り、注意を促した。

「今度フルベツキ御雇入之事ニ付山口範蔵長崎表へ罷越候得共唯東京呼迎諸事談合共不苦間敷候得共彼者ハ耶蘇教主ニ御座候間表向政府ニテ御雇入ニテハ議論如何可有御座候事」

④7 佐波亘編「植村正久と其の時代」、第一巻、三七四—三七七頁・昭和十二年。

④8 G. F. Verbeek, "History of Protestant Missions in Japan" p. 51~52.

④9 小沢三郎「幕末明治耶蘇教史研究」、五三—八四頁、亜細亜書房 昭和十九年。

④50 大隈重信文書、第一巻二七頁、明治二年二月七日付。小沢三郎、「日本プロテスタント史研究室」四一頁。

④51 「フルベツキ」はまた「フルベツキ」「ウェルベツキ」「ボルベツキ」「フェルベツキ」「フルベツキ」「ベルベツキ」「ヴァーベック」等種々の形で記されている。

しかしこの手紙を読むまでもなく、すでに長崎でフルベツキに学んだ大隈は、今は政府の要人として、彼が宣教師であることは勿論百も承知だった筈である。しかも何故敢て彼を雇ったか。政府内部に個人的知己が少なくなかったことも理由の一つであろうし、また新政府がフルベツキの知識を切実に必要としたのが最大の理由であることはいうまでもない。しかも同時に一方では、切支丹として必要な監視を怠ってはいなかった事情もやはり考慮せざるを得ないのである。

昔、弾正台という役所があった。本来は大宝令に制定された官制で、内外の非違を糾弾し風俗を肅正することを掌り、親王及び左右大臣以下の朝臣の非違をも、太政官を経ず直ちに奏聞する権力を有した。これが明治二年に復活したのであるから、その趣旨は明瞭であろう。相良知安を捕えたのも此の弾正台であるが、いろいろの情報を集めるためにここから派遣される秘密の探索者があり、諜者と呼ばれた。この諜者の報告書が資料として若干残っており、切支丹の動静をさぐることも重要な任務の一つであつたらしく、その中に、他の宣教師や信者の名にまじって、フルベツキの名が出て来るのである。例えば正木護は、桃江正吉という偽名で信者をよそおい、教会内に潜入して動静をさぐっていた諜者であるが、その報告に曰く、

(史料第十号、明治六年五月三日出)

四月一日松平伊賀守(元旗本カ未詳)三男松平忠孝以前ウエルベツキ門人今日ヨリ小川廉之助方へ寄宿シタムソンニ依頼シ専ラ教法ヲ修ス

五日漢洋五十冊金八両三步三朱ウエルベツキ澳洲博覧会ニ近日出帆スルヲタムソンカルロテスニ告ン為ニ来リ因ミニ右ノ書ヲ求ム

⑤② 大隈侯爵家旧蔵、現在早稲田大学図書館所蔵。小沢三郎、「幕末明治耶蘇教史研究」三六三頁。

⑤③ タムソン David Thompson (一八三五—一九一五年) 米国長老教会より派遣された宣教師。一八六三年(文久三年)来日。

⑤④ カルロテス(また、カロゾルス) Christopher Corrothers (一八四〇—) 米国長老教会より派遣された宣教師。一八六九年(明治二年)来日。

九日漢洋五十六冊金三兩二歩ウエルベツキ注文ニテ同人妻來テ持帰ル外ニ漢訳八冊尼适頼生求ム

フルベツキは勿論政府の信任を受け顧問となった自分⁵⁶に謀者がつけられていようとは考えなかったであろう。しかしこれが明治政府の外人教師を遇する一つの道であって、政府の必要とする知識技能だけを差出せばよい、それ以外のことにについては些かも心を許さぬ態度がうかがわれる。これは幕末期の洋学に対する支配的な考え方——「東洋の道德、西洋の芸術」(佐久間象山)、或は「器械芸術は彼に取り、仁義忠孝は我に存す」(橋本左内)等の言葉に代表される絶対主義的洋学觀をそのまま踏襲したものであって、明治政府要路者の反動的な側面を具体的に明示するものであった。しかもこの態度が明治の教育全体の大きく反動化する明治中期以前、明治政府成立直後において、すでに明瞭に看取される事実に注目せねばならない。

何れにせよフルベツキの布教活動は、公式には明治六年の高札撤去まで許されなかった。しかし長崎上陸以来決して彼は徒らに時を過していたのではなく、別の面からその生徒を教化しようとつとめたものと信ぜられる。即ち彼が英語教師として用いた教材には、すでに石黒も述べた如き万国公法(国際法)も含まれているのみならず、聖書もあり、更にアメリカ独立宣言、アメリカ憲法等、単に信仰のみならず、近代的精神の成果である政治思想の紹介説明に役立つものが、恐らく意識的に選ばれている事実を見逃すことは出来ない。

これが後に明治年間政治的に大きな役割を果たした彼の弟子達に如何なる反響を見出したか。例えば明治二十七年の福音新報に、「フルベツキの談話」として次の記事がある。

「氏が長崎に在りて語学を教授したるなかには其ののち顯貴の地位に上りしものも尠からず、現に在野政党の首領として頗る智慮に富めりとの聞えある九州出身某伯は同藩の某(此の人も伯爵に叙せられたり、民撰議院設立の建言書に連

⁵⁵ 東京ではフルベツキの外出にはしばしば数人の武士が同行護衛して暗殺の危険を防いだ。明治十年勲三等に叙せられたのは宣教師の中では破格の優遇であった。

⁵⁶ 「福音新報」第四卷一四号、五一六頁(明治二十七年六月十五日)。

署せし人も此の人なり」とともにフルベツキの門に出入して英語を学びたり。業漸く進みて一日米國連邦独立の檄文を講読せしに、其の冒頭に造物者は人を同等に造れり云々と宣言せし段に至り、二氏の驚愕一方ならず。其の未だ嘗て夢にも想ひ得ざりし議論を読みし此の時に二氏が将来の事業は胚胎せりと謂はざるべからず。二氏は次ぎに米國有名の法官クウレイの憲法論を博士に就きて学びしといふ。」

アメリカ独立宣言の内容意義について今立入ることは差控えるが、自然法、社会契約説、人民主権説、革命論等、その中に含まれる思想が、当時まだ基本的人権の何たるかを知らず、封建的階級制度、前近代的社会組織の下にあった日本人青年に、少なからぬ衝撃を与えたことは想像にかたくない。ここにある野党の首領が誰であったかはさておき、その野党的立場の思想的根柢は、この時に据えられたものである。しかも同じくフルベツキの弟子でありながら、大隈重信或は副島種臣らが「米國の如き民主國は全然我國と相容れない」として、アメリカの政体を非としたのは何の故であろうか。

此の副島種臣が、明治七年には民撰議院設立建白書に、古沢滋、岡本健三郎、小室信夫、由利公正、江藤新平、板垣退助、後藤象二郎と名を連ねて署名しており、明治一四年には、自由民権論を唱える大隈重信が政変の立役者となつた事実もあつて、些か奇異の感なしとしない。大隈は文久元年（一八六一年）二四才にして長崎に至り、フルベツキについて英学をまなんだが、フルベツキは彼と副島とを指して、

「私は二人のごく有望な生徒をもつた。それは副島と大隈とである。かれらは新約全書の大部分を研究し、アメリカ憲法の大体を学んでしまった。」

と賞讃した。大隈自身もこのことを認め、

⑤⑦ 当時の情勢は明治政府はじまつて以来最大の危機であつた。所謂「北海道開拓使官有物払下事件」で与論のはげしい非難を受け窮地に立つた政府は、一方ではこの払下げを中止すると共に、他方では澎湃たる自由民権論を背景に、急進的な立憲制採用を主張した首席参議大隈を罷免し、勅諭を出して明治二十三年に国会を開くことを約束し、辛うじてこの危機をのりこえた。

⑧⑤ 「大隈侯八十五季史」一一七頁（大正十五年）。

⑩「余等が内外に向つて種々の運動をなすの根柢となせし所は、実に此の学舎⑩にありしなり。」

と言ひ、更に、

⑪「当時、最も脳漿を刺戟せしは荷蘭オランダの建国法なりき。余は非常の苦心を以て漸くこれを読みしに、その記するところ、着々経国の要領を得たるを以て、余は夷狄の国にもまたかかる良制度あるかと感嘆措く能はざりし。あゝ、これこそ実に余が立憲思想を起したる濫觴にして、これまで多年立憲政体の設立に苦心焦慮したるは、全く此の思想の發達したる結果なりとす。しかのみならず、余は北米合衆国が英に叛いて独立したる往時の宣言文を読んで、始めて泰西人の謂はゆる自由権利といふものの真意を解し、彼の文物制度、頗る我れに優過する所あるを覺り、ひそかに之れを移植せんと志望を懐きたり。これを要するに、余の立憲思想立憲主義は、蘭学寮在学の日に於て其の萌芽すでに發生したりしなり。

と述べているのである。しかし果して彼等が「泰西人の謂はゆる自由権利といふものの真意を」十分に理解し得たかどうかは正しく問題であらう。

蓋し副島も大隈も佐賀藩の下級武士の出身であり、偏狭な⑫武士道精神を最高の道德規範として育てられた。彼らにとつて一大事とは己が藩の盛衰浮沈であった。やがてフルベツキに遭つて新らしく政治的に開眼したとはいつても、直ちに近代的な基本的人權思想そのものを、深く認識し得たと考へるならば、余りに皮相の觀察に過ぎるであらう。ようやく藩幕

⑤ 円城寺清、「大隈伯昔日譚」九頁（大正三年）。

⑥ 佐賀の英学塾（致遠館）。長崎にあり。フルベツキは濟美館で教へる傍、隔日に此処に来て大隈らを教えたのである。

⑦ 円城寺清、前掲書、一四—一五頁。

⑧ 『武士道』というは、死ぬ事と見付けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわって進むなり。「奉公人は一向に主人を大切に歎くまでなり。これ最上の被官なり。」「葉隠」上、二三頁、岩波文庫（昭和十五年）。は有名であるが、『釈迦も孔子も楠木も信玄も、遂に竜造寺、鍋島に被官懸けられ候儀これなく候えば、当家の家風にかない申さざる事に候。』（前掲書、一七頁）も亦要するに己が藩のためにのみ尽すべしという封建武士の精神の端的な表現である。

体制を倒して国家的統一をなしたとげたとはいえ、世界的な植民地拡張の気運にあって亜細亜の風雲はけわしい。未だその基礎堅からざる祖国の国家的利益を追求し、自主的経営の実を挙げようとする段階においては、所謂市民的自由の理論と要求とは寧ろ私利私慾の発露にすぎず、一個の危険思想として退ける他はない。日本の類勢を挽回し、確乎不拔の国体を建てて万国に対峙し、進んで東洋に雄飛しようとする一つの国家的課題を設定する時、むしろ天皇制と強固に結びついて、一般人民の固有の権利を蔽覆の如く捨てて顧みない意識と行動とが引出される。「国体の上からして米国の如き民主国は全然我国と相容れない」とした副島大隈らの見解は、既に新政府の要職にある者の反射的本能的な基本姿勢として十分理解せねばならぬ所であり、ここに所謂士族民権の思想としての限界を見ない訳にはゆかないのである。副島外交の名をとったほどの強引な典型的国権外交を展開した副島にせよ、或いは切支丹迫害を政府の名において弁護し、後日はまた悪名高い対支二十一ヶ条要求に汚点を残した大隈にせよ、外見的進歩性の裏に現実目的の保守性が密に結びついている事実を如何ともなしがたい。またここに明治政府の性格の根本的な矛盾を見るのである。

かくして副島大隈らが、相良岩佐ひいてはフルベツキの意見をとって、強力にドイツ医学採用を支持したのは、当時医学が最も進歩しているとされたドイツを学ぶことが、日本の政治の上のまがう方なき保守勢力にとり最も安全な道であったからであり、またその後の日本医学が負わねばならなかった保守性も、如実に示されていたのであった。

周知の如く、民主的精神の基礎をなすものは基本的人権であり、この基本的人権の有力な根幹が、信教の自由や、思想及び良心の自由、学問の自由である。日本が解体新書出版によって、近代思想形成の上に辛うじて一步を踏み出した一七七四年をへだたる僅か二年、アメリカは一七七六年に「独立宣言」によって政治的自由をかちとると共に、一〇年後の一

⑳ 後藤靖「自由と民権の思想」、『岩波講座、日本歴史』第一六卷 一四七一—一八五頁、昭和三十七年。

㉑ 第二次大隈内閣の時の事件で外務大臣は加藤高明であった。これによって中国各地に反日運動が起り、政府が最後通牒によって中国を屈服せしめた大正四年五月九日はそのまま中国の「国恥記念日」となった。

㉒ 遠山茂樹、「明治維新」、二三四頁、岩波全書、昭和二十六年。

七八六年「Virginia 信教自由法」を定めて、広く宗教、思想、言論ひいては学問の自由を確立した。これは今日、アメリカ文明が人類になした最も貴重な貢献^⑥の一つと言われる。明治政府はこの信教の自由を改めて否定することによって、絶対権力への道に具体的に歩を進めたのであって、これが日本の医学、ひいては科学全般に与えた影響は決して過小評価することが出来ないのである。

これについて二つの象徴的な事件を次に挙げておきたい。

四、ベルツの辭職と日本医学批判

いうまでもなくベルツ Erwin Baelz (一八四九—一九一三年)は、日本医学の最大の恩人の一人であるが、明治三三年四月一八日の日記に次のように書かれている。

「今日、重大な行動に出た。かねて申出のあった勤続二十五周年記念祝賀会を断念して、大学を辭職するむね通告したのである。もちろん、好んでこのような処置をとった訳ではない。外人教師を取扱うやり方が、次第に我慢できなくなつて来たからだ。医学部内に自主を目指す傾向のあったことは、もうずっと以前から気附いていた。このような意向は十分理解できるし、また正当でもある。事実、自分はそれを必要と考え、常に自らそれを促進してきた。だから自分は、再契約の申出があった時、すでにたびたび学部当局に、一度あなた方だけでやってみてはどうかと自分から言い出してすすめたのである。しかしそのたびごとに、いつも留任するよう押しつけられてしまった。それにもかかわらず当局はあらゆる機会にわれわれ外人を無視しようとするのであった。ところが先日、綜合病院と病室を新たに設ける計画が、自分に相談なしに、もうかなり出来上っていることを耳にした。これは、何といてもあまりにひどい話だった。自分

⑥ アメリカ学会訳編「原典アメリカ史」第二巻、二六四頁、岩波書店、昭和二十六年。

⑦ 菅波竜太郎訳「ベルツの日記」、第一部下、一七一—一八頁、岩波文庫、昭和二十七年。

は総長のところへ行き、職を辞して大学から円満に身を引きたいと声明した。総長は文字どおりびっくりしたが、医学部内に事実、すべてを独力でやろうとする傾向の存在することは、総長も自認せざるを得なかった。しかし、もし何らかの措置がとられたとしても、それはすべて自分一個人に向けられたものでないことは確かだ、むしろそれは一つの方針から出たものであるというのだ。自分は総長にこう述べた。——そのような見解を全く妥当だと認めることはできるが、そうだとすれば、これを堂々と公言する勇気があって然るべきだ。まず留任を勧誘しておきながら、同時に重要な問題では除けものにするようなことは許さるべきでない。どんな事があっても、こんな取扱いは甘受できない。これでは辞職の結論に到達せざるを得ない。」

かくして明治三五年（一九〇二年）六月十日、彼は東京帝国大学における一六年の教師生活を終るのであるが、この前後の事情は果してどうであったか。

当時東京帝国大学附属医院の建物は、東京医学校以来のもので、不便であるのみならず拡張の余地もなく、種々研究の結果、構内運動場東方一帯の地を医院敷地にあて、明治二六年九月以来、逐次病室を建てていたことは事実であるが、それがすべてベルツの眼に触れなかった筈はない。やはり問題となるのは内科病室であろう。東京帝国大学五十年史によれば、

「内科病室の新営は種々の事情により最後に繰り延べられたるが、病室狭隘にして患者の収容に不便を感ずるのみならず、其敷地に医科大学教室新営の計画あるにより一時法を設けて急を救ふの必要あり、明治三十二年六月当局は寄宿舎の閉鎖を断行し此処に内科病室を移せり。乃ち外科病室の新築落成を俟ち、明治三十六年六月内科病室（木造平家建）三棟及臨床講義室の工を起し、翌三十七年竣工せり。」

当時大学にはベルツの弟子はまだ沢山いた筈であるが、内科の教授だったのは青山胤通及び三浦謹之助であり、何れもベルツが手塩にかけた弟子達であった。この人達が大切な内科病室乃至講義室の増築新営について、恩師であり且つ同僚で

⑧ 「東京帝国大学五十年史」下、七〇—七二頁、昭和七年。

あるベルツに全く一言の相談もせず、事に事を運んで、ベルツを憤激せしめたのは一体何故であろうか。またそれはどうして可能だったのであろうか。

当時社会的には反独的感情がかなり強く存在していたことは事実であり、「ベルツの日記」にも度々その点が指摘されているのみならず、彼自身本国ドイツに帰国して後、その報告を書いている程である。また少くも制度の上では、ベルツはあくまで教師であって、青山や三浦の如き教授ではなかった点も、一応考慮せねばならない。それにしてもなお、ベルツが何らの相談も受けなかった事実を説明し尽すことは出来ない。それについてはやはり、当時の総長菊地大麓が弁明して、医学部内に事実すべてを独力でやろうとする傾向のあること、しかもそれが一つの方針から出たものであると述べているのが、最も真実に近いのではあるまいか。恐らくそれが大学当局、ひいては政府の方針^⑥だったのであり、その方針に逆ってベルツに相談することを、当時は差控えねばならなかったのであろうと推測する他には、ベルツが何も知らなかった点を説明することは困難であろう。

青山、三浦とベルツとの個人的な関係も一応問題とはなり得ようし、また日本人側の教育の方針がベルツのそれと必ずしも一致しなかったと見られる節もある。しかし何れにせよこの時、大学当局ないし明治政府はもはやベルツを必要としてはいなかった。すでに必要なものはすべて受取ってしまったていると考えたのである。

しかしベルツは果して何を伝えたのか、或いは何を真に伝えようと思ったのであろうか。ドイツ医学のすぐれた専門的知識は、既に多くの弟子によって引継がれた。しかし彼が真に伝えたく思ったものは、弟子が引継いだものと必ずしも同

⑥ ベルツ、「日本に於ける反独感情とその誘因」、菅波竜太郎訳、前掲書、第二部下、一八五—一九六頁（昭和三十年）。

⑦ 大学の教育を外人教師にまかせるといふのは、明らかに緊急的な措置であって、これを漸次日本人に代えるというのが、政府の最初からの方針であった。「日本科学技術史大系」、第八巻、三七〇—三七二頁、昭和四十年。

⑧ 明治三十五年四月二日第一回日本医学大会に於ける演説で、ベルツは実際的な臨床を重視するとしばしば非難のまとなつたことを述べている（菅波竜太郎訳、前掲書、第一部下、六一—七一頁）。日本医学の臨床軽視の一般的風潮と相俟って興味深い問題の一つである。

一だつた訳ではなかつた。このことは慎重な考慮を要する問題ではないだろうか。

我々がどのように考えるにせよ、ベルツ自身の考えは今日明らかである。即ち、それは彼の在日二五周年を記念する祝典の際、ベルツが行つた演説の中に、今日も色褪せることない真実な日本医学批判の言葉として語られている。

「人々はこの科学を、年にこれこれだけの仕事をする機械であり、どこか他の場所へたやすく運んで、そこで仕事をさすことのできる機械であると考えています。これは誤りです。西洋の科学の世界は決して機械ではなく、一つの有機体でありまして、その成長には他のすべての有機体と同様に一定の氣候、一定の大気が必要なのであります。」

かれら（外国人教師）は種をまき、その種から日本で科学の樹がひとりでに生えて大きくなれるようにしようとしたのであって、その樹たるや、正しく育てられた場合、絶えず新しい、しかもますます美しい実を結ぶものであるにもかかわらず、日本では今日の科学の『成果』のみをかれらから受取ろうとしたのであります。この最新の成果をかれらから引継ぐだけで満足し、この成果をもたらしした精神を学ぼうとはしないのです。」

低迷混乱する日本の医療問題の現実を眼前においてこの一節を想起する時、我々の感慨は決して浅くはないのである。しかもこれは単に日本医学批判というにとどまらず、「東洋の道徳、西洋の芸術」。或いは「器械芸術は彼に取り、仁義忠孝は我に存す。」という、絶対主義的洋学観に対する、一つの根本的批判でなくて何であらうか。

(72) 菅波竜太郎訳、前掲書、第一部下、四九五頁。

(73) ベルツを俟つまでもなく実はすでに明治四年、中村敬宇の匿名で「擬泰西人上書」（漢文）を書き、その中で「貴国（日本）ハ其ノ枝葉ノ美ヲ喜ビテ尽ク之ヲ己ニ得ント欲シ、百方試学シテ猿猴ノ為ニ似ルヲ愧ヂズ、而シテ顧ツテ其ノ由ル所ノ本根ヲ遺ル、其レ亦タ惑ヘリ。……他国ノ糠粕ヲ好ンデ而シテ其ノ精神ヲ惡ミ、首鼠雨端進退捩ルトコロ無シ、……夫レ西国治下ノ美ヲ慕ヒ文芸ノ善ヲ嘉シ機器ノ巧ニ驚キ、尽ク之ヲ己ニ得ント欲セバ、則チ宜シク句々ニシテ汲ミ支々ニシテ求ムベカラズ、必ズ当ニ斯ニ臻ルノ本源ヲ探ルベキナリ……兩國ノ教法、貴國ノ嫌惡スル所ノ者ハ其ノ源ナリ（高野忠勇和訳）」と言っている。これは切支丹禁制下に発表された基督教弁護論であるが「明治初期の思想史上軽々に看過し得ざる」「大胆な歴史的発言」であつた。吉野作造編輯「明治文化全集」、第一五卷、二二三—二三九頁、日本評論社、昭和四年。

既に述べた如く、アメリカがドイツに学んでその最も尊い糧としたものは、学問の理想、理性に基づく自由探求の精神であった。西洋の科学が今日の成果を生み出すためには、「数千年にわたって努力した」「苦難の道」があった。その過程の中で味わなければならなかった深刻な懷疑や苦惱、生涯をかけた観察や実験、成功と失敗、失望と歓喜、あらゆる権威に屈せず真実を貫く人間としての誠意、これらはすべて日本が以て学ぶべきまことの糧であった。しかも現実には日本は、この長い西欧の学問の成果の中から、自分に都合のよいもの、自分の欲するものだけをを選び、他の学問の全体系から切離してそれだけを我が物と思ひ込み、いつかは科学者に最もふさわしくない権威主義的な立場に陥ることさえ、なかつたとは言えないであろう。少くもこれは当時の為政者に一貫した基本姿勢であつたし、同様の実学思想が社会一般の通念であつた。そして、一六年間の教師としての努力の結果として、西欧につちかわれた大学の理想、真理探求の精神、思想の自由、学問の自由を、日本の大学に移し植えることは遂に出来なかつたと、ベルツは告白しているのである。ベルツはもはや相談する必要も認めず、遂に奮然として大学を去るに到らしめた大学当局と彼の弟子たちは、果して当時何を考へていたのであろうか。

今日我々は我々自身の眼を通して、具体的に見る日本の実情について、それが医学教育であれ、或いは広く医療全体の問題であれ、憂うべき幾多の事態を否定することが出来ない。例えば商業上の採算を根底として運営される私立医学校が、正規の試験成績によらざる大量の寄附入学を認めても、当事者のみならず社会もその弊害を知りながら、何ら改善のための処置を取らざる如き、恐らく冰山の一角に過ぎぬものであろう。学位は単に開業医の地位を権威づけるための一つの方にすぎず、一旦学位を得て後は、もはや研究は無縁のこととなり終るとき医学界の一般的風潮も亦、医師に対する不信を醸成する原因の一つである。しかもかかる現実を殆んど必至ならしめる社会情勢、一般経済事情も亦、結局はすべてが幕末以来の実学思想から殆んど一步をも出ないものであることを、ここに敢て指摘せざるを得ない。特に全般の医療問題と関係深い臨床教育の問題について一言すれば、教育者たる教授の多くが、個々の学徒に臨床医学としてのその生涯にわたる好学の精神を教えこむのではなく、社会に対する熾烈な責任感を教えこむのもなく、本質的には臨床と殆ん

ど關係のない学位だけを当面の目標とした医局生活を認め、学位がすめば平然と研究そのものを棄てて医局を去ることを
みとめ、一方ではその個々の医局員の(極端に言えば)その場限りの研究をつみ重ねて、自己の生涯の業績を形造る如き、
他方ではすでに医局を離れて、現医療制度下に粒々辛苦する旧医局員の学徒としての運命に、何らの関心を払わざる如き
実に悲しむべき現実と言わずして何であらうか。

これが果して明治維新以来のドイツの影響であると言うことを、許されるべき事態なのであらうか。むしろ今我々の目
前にあるのは、Bowers の指摘したときドイツ医学の哲学や an educational program with a philosophy and system
that are German 体系ではなく、明治維新の施政の中にありありと見るような、日本固有の、我々自身の哲学であり体
系であつて、急激なアメリカの影響を以てしても、容易に動く所がなかつたのであると言うべきではないのであらうか。
既にベルツを棄てたごとく、明治時代の後半において、我々は真実の意味ではドイツ医学を棄てたというのが、真相なの
ではないであらうか。

かかる事態を根本的に改めるには、医師のみならず社会各層の深刻な認識と長期の努力が必要であることはいうまでも
ない。日本が是正すべきは日本自身であつて、ドイツでもなくアメリカでもないのである。何れにせよ、日本の医学ひい
ては日本の科学が負わねばならなかつた宿命的な課題を、象徴的に示すもう一つの事例を次に挙げよう。

五、明治天皇と東京帝国大学(聖諭記の教訓)

明治一八年、森有礼が文部大臣になると、文部省は帝国大学令、小学校令、中学校令、師範学校令の一連の学校令を出
して、日本の学校制度の根本的改革に乗り出したが、これは教育と学問とを強い国家的統制の下におき、その軍国主義化
を実現しようとする重大な布石であり、それまでの自由思想に基づく近代的教育を改め、また理想主義的な科学教育の
ありかたにも、根本的な修正を加えるものであつた。科学的合理的な精神の養成は、封建的儒教的精神に対し、大きな危

険として意識されたのである。以来、近代科学の合理的世界観、その批判的精神に敵対する修身、日本歴史、軍事体操等が教育の中心に入込み、科学教育は衰退の路へ向うこととなった。この間の象徴的事件として、大学令発令直後の、明治天皇の帝国大学行幸を振り返ってみよう。

即ち帝国大学令発令を契機とした明治一九年一〇月二九日、明治天皇は東京帝国大学に行幸、渡辺洪基総長の先導で、各教室、実験室を巡覧した。その後、侍講元田永孚と大学の印象につき意見を交した結果、渡辺総長は修身の学科なき点に関し、きびしい問責を受けることとなる。その顛末を記した聖諭記なるものが、¹⁴⁾「東京帝国大学五十年史」に残されている。明治天皇と元田永孚との間の問答の形を取っているが、その一部を次に掲げよう。

「十一月五日午前十時例ニ依リ参内既ニシテ 皇上出御直ニ臣ヲ召ス臣進テ 御前ニ侍ス 皇上親諭シテ曰ク朕過日大
学ニ臨ス設ル所ノ学科ヲ巡視スルニ理科化(学)科植物科医科法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖モ主本トスル所ノ修
身ノ学科ニ於テハ曾テ見ル所無シ和漢ノ学科ハ修身ヲ專ラトシ古典講習科アリト聞クト雖トモ如何ナル所ニ設ケアルヤ
過日觀ルコト無シ抑大学ハ日本教育高等ノ学校ニシテ高等ノ人材ヲ成就スベキ所ナリ然ルニ今ノ学科ニシテ政治治要ノ
道ヲ講習シ得ヘキ人材ヲ求メント欲スルモ決シテ得ヘカラス仮令理化医科等ノ卒業ニテ其人物ヲ成シタルトモ入テ相ト
ナル可キ者ニ非ス当世復古ノ功臣内閣ニ入テ政ヲ執ルト雖トモ永久ヲ保スヘカラス事ニ継クノ相材ヲ育成セサル可カラ
ス然ルニ今大学ノ教科和漢修身ノ科有ルヤ無キヤモ知ラス国学漢儒固陋ナル者アリト雖トモ其固陋ナルハ其人ノ過チナ
リ其道ノ本体ニ於テハ固ヨリ之ヲ皇張セサル可カラス故ニ朕今徳大寺侍從長ニ命シテ渡辺総長ニ問ハシメント欲ス渡辺
亦如何ナル考慮ナルヤ森文部大臣ハ師範学校ノ改正ヨリシテ三年ヲ待テ地方ノ教育ヲ改良シ大ニ面目ヲ改メント云テ自
ラ信スルト雖トモ中学ハ稍改マルモ大学今見ル所ノ如クナレハ此中ヨリ真成ノ人物ヲ育成スルハ決シテ得難キナリ汝見
ル所如何」

(74) 「東京帝国大学五十年史」上、一〇六一—一〇六九頁、昭和七年。当時の新聞には行幸の記事はあるが、聖諭記の件の報道は見出し得なかつた。或いは総長に内密に伝えられたものであつたかもしれない。

元田は對えて曰う、

「今宸勅ヲ奉スルニ果シテ臣カ見ル所ノ如シ臣嘗テ大学々科ノ設ケヲ聞クニ修身ノ学科ナシ……其 余ハ皆洋学專修ノ徒而シテ此人タルヤ大抵明治五年以來ノ教育ニ成立シタル者ニシテ西洋ノ外面ヲ摹仿シ曾テ国体君臣ノ大義仁義道德ノ要ヲ聞知セサル者共ナリ彼ノ某等ノ著書ヲ一見シテモ其放言スル所ニ依テ其思想ノ赴ク所ヲ概見スヘシ此等ノ脳髓ヲ以テ生徒ヲ教導セハ後來ノ害実ニ恐ル可キナリ今ニシテ此ヲ停止セサレハ復挽回スヘカラス今陛下ノ直衷ヨリ發シ徳大寺ヲ遣ハサレ渡邊總長ニ詰問ヲ賜ハラハ皇道ノ興張果シテ此ヨリ生ルヘキ也臣誠恐深ク陛下ノ此言ニ感仰欽敬ス臣敢テ一身ヲ顧ミス唯陛下ノ命スル所森大臣渡邊總長ニ向テ問難スル所アラントス理化植物工科等ニテ其芸ニ達シタリトモ君臣ノ道モ国体ノ重キ脳髓ニ之無キ人物日本國中ニ充滿シテモ此ヲ以テ日本帝国大学ノ教育トハ云ヘカラルナリ」

當時の為政者は仁義道德を知つて自然を知らなかつた。修身を知つて人間を知らなかつた。従つて自然科学が心の美しい者にのみその秘奥を開扉する眞実な世界であることなど、考えることも出来なかつた。自然科学を中心とした「洋学專修の徒」は、「恐るべき害毒の源」としてしか視野に入らなかつた。「西洋の外面を摹仿し」とは、まさに事實であつただけに、今日感慨も一しお深い。かくて元田の「敢て一身を顧みざる」問難を受けた當時の渡邊總長（法学者）が、徳大寺侍従長にいかに答えたか、東京帝国大学がこの聖諭に対し、具体的にどのやうな対策を立てたかの顧末は、今日不明である。しかし明治一九年という時点において、これが学問の府である大学と、権力の象徴であつた天皇との關係を極めて具体的に示す一つの事件であつたことは疑いをいれぬ所である。

もとより東京帝国大学は、明治時代における官立最古最大の大学であり、或る意味では天皇に奉仕するために創られた

⑳ 例へばニュートンの有名な言葉、「私が世間にどのように映るか、私は知らない。しかし私自身の眼には、この私は、眞理の大海原が究められないままに眼前に横たわっている、その海際で、戯れながら、時々潜かな小石や普通よりも美しい貝殻を見つけては嬉々として子供のように思われる。」（安田徳太郎、加藤正訳、「ダンネマン大自然科学史」第四卷七四頁、三省堂、昭和三十年）これは全く異質の言葉としてひびいたであらう。

ものとも言い得るであろう。しかし例えばドイツの大学も初めは領邦君主の手によって作られ与えられたものでありながら、後代には真理探求の府としての大学の理想をうみ出す母体となったのである。その創始者が誰であるかその経済的維持者が誰であるかの現実には必ずしも関係なく、大学にはその内面的本質よりうまれる自からなる使命がある。大学の理想と国家的現象学問の自由と思想的統制、この間の避け難い軋轢は、すでに明治中期において、かくも鮮明な形で露呈していたのである。

何れにせよ、明治中期以降必然的に招来された科学教育全般の衰退は、修身道德教育の外面的な昂揚にもかかわらず、本質的には科学的合理主義、学問的批判的精神の萎縮を衷にはらみ、物理学化学生生物学等の自然科学教育を必須の前提として成立つ医学教育全体の上にも最も不幸な影響を与えた事実を果して誰が否定することが出来るであろうか。今日の昏迷を極めたる日本医療系ないしは医学教育全体の現実の姿こそ、その悲しむべき結果でなくて何であろうか。これについては後日なお稿を改めて詳細に論及したい。

六、結 語

明治初年におけるドイツ医学採用は、相良知安岩佐純らの主張に、フルベツキの証言が加わって実現したのであるが、参議副島種臣或いは大隈重信らが、天皇制確立を意図した政治意識が、最も強く作用したと見られる節が多い。しかも⑯

⑯ 今次大戦中、政府が高唱した所謂「科学する心」は畢竟技術する心に他ならなかった。（帝国大学新聞）昭和十六年三月三十一日、「矢内原忠雄全集」、第二九卷、五七七—五八〇頁・岩波書店 昭和四十年）。しかしはじめ「科学する心」となえた橋田邦彦は傑出した生理学者であり、その意図と努力については疑う余地がない。終戦に際しての彼の覚悟の自決は、日本の科学の負うた矛盾の悲劇的な象徴であった。——科学振興は今日の政治家もしばしば口にするが、それが真に科学的精神の振興であるならば、それは為政者、権力者に都合よいことばかりでないことを覚悟すべきである。彼らは科学に名を借りて、従順な技術のみを要求する。我々は橋田邦彦の死を無駄にしてはならない。

の政治意識そのものは、却って眞の科学的精神の育成をさまたげ、権威主義的な歪曲を學問の世界に持込み、その後の日本国民の科学的精神の覚醒に大きな陰影を残したのである。

第二次世界大戦における敗戦の結果、我々は信仰の自由、學問の自由を含むあらゆる自由を回復したが、不幸にしてこれらは敗戦に基づく受身の所与であつて、必ずしも自主的に積極的にかちえた自らの成果と言ふを得ない。これを眞に我々がものたらしめる為には、なお短かからぬ忍耐と努力が必要であつて、決して拱手傍觀することは許されない。

この意味において、明治維新の政局を動かした要路者が最も何を恐れ、何を拒否したかを眞実に見極め、その理由を探り、我々自身の現実の問題として、今日の社会の中にその解決を見出すことは、科学者と敢て言わず、ひろく一般社会人の、後の世代に対する重大な責務であらう。何故なら、封建思想の残渣は未だ到る処にあり、その絶対的権威主義は、今日といへども必ずしもその力を失つてはいないからである。

終りにのぞみ、終始變らず御懇切なる御指導御校閲をいただいた恩師、東京大学名譽教授、虎の門病院々長沖中重雄博士、東京大学名譽教授、順天堂大学教授小川鼎三博士に、衷心より謝意を表する。またフルベツキ資料或いは幕末明治の宗教事情について煩をいとわず御教示を惜しまれなかつた日本プロテスタント史研究家小沢三郎先生にも、厚く御礼申上げる次第である。なお資料の蒐集整理につき御協力いただいた赤羽園子、藤村英子両氏の勞を深く多とする。

因に本稿は、昭和四一年二月五日に行われた日本医史学会例会での報告に、若干の説明を補足註記したものである。

Summary

It cannot be denied that the testimony of G.F. Verbeck greatly contributed to the adoption of the German medicine at the beginning of the Meiji era, but this adoption must also be considered, as one of the results of the policies of the Meiji Government, which were characterized by their unmistakable conservativeness, their strong inclination for the Kaisership in Germany.

Then the medicine of Japan in the Meiji era constituted a curious linkage between the modern scientific spirit in Western civilization and the conservative, feudalistic idea in this country.

Witho true humanistic aspects, unreasonable contempt of the clinical fields of medicine was the inevitable consequence of such policies.

新刊紹介

緒方洪庵 適々齋塾 姓名録 緒方富雄 編著

緒方洪庵(一八一〇—一八六三)の大坂の蘭学塾「適々齋塾」「適々塾」「適塾」は、明治維新前後に日本の近代化に重要な役割を演じた人物が多数輩出したので有名である。そのなかに村上代三郎、村田蔵六(大村益次郎)、佐野常民、箕作秋坪、橋本左内、大島圭介、長与専斎、福沢諭吉、花房義質、高松凌雲、足立寛、池田謙齋等がいるのを見ても、この塾の日本文化史上の意義は大きい。

この塾に学んだものは、前後二十五年間に三千といわれているが、現在緒方家所蔵の入門帖「姓名録」の署名は、六百三十とこえるにとどまっている。しかし各署名者の生涯を想うとき、感慨の無量なるものがあり、まさに偉大な文化財である。編著者緒方富雄博士は、さきに「緒方洪庵伝」(岩波書店)にこの姓名録を、活字に移して紹介し、多くの研究者、関係者に大きな便宜を与えられたが、原典の複写の意義もまた大なるを考え、「姓名録」の各ページを写真版とし、これと活字転写とを上下に対照させた実用的な複写本を製作された。

これによって、緒方洪庵とその門人たちの研究者は、一層の便宜を得るのみならず、全国に分布する洪庵門人の郷土関係者のよい記念となるであろう。

人名索引は、今回はじめて作製されたもので調査研究にまことに便利である。
注意 本書は書店の店頭販売をしませんから、発行所へ直接か、あるいは書店を通じて御注文のこと。

発行所

東京都中央区銀座東四一七(七七ビル)
財団法人 学校教育研究所

電話(五四二)六九一〇番
振替口座東京一八六〇三〇
B5版本文一五八ページ
毎ページ写真版入り
五〇〇部限定
頒価二五〇円(送料発行所負担)
日本医史学会員に限り
頒価二五〇円(送料発行所負担)

禪僧鈴木正三の唱えた医者の倫理観

横浜市大医・公衆衛生 杉田 暉道

Ethics of a doctor claimed by Shosan Suzuki who is a bonze of Zen sect. Kido Sugita

鈴木正三(すゞきしやうさん)は、日本仏教史上において殆んど存在を認められていない仏教者である。試みに「日本仏教史」または「日本禪宗史」という種類の書をひもといてみても彼の名を見出すことは出来ない。

しかしながら、彼の唱導した仏教のうちには種々の注目すべき近代的性格を見出すのである。

正三は三河出身の武士である。天正七年(一五七九年)に三河国東加茂郡則定郷(盛岡)村で松平家の家臣たる鈴木氏の長子として生まれた。通称を九太夫といった。正三は俗名であるが出家した後もその名を襲用した。関ヶ原の役や大阪の冬および夏の陣にも従軍して武功をたてて旗本のうちでは重要な人であったが、元和六年(一六二〇年)に四二才で出家した。彼は出家する前からしばしば寺院に

寄寓し、当時の有名な禅僧と親交があった。彼はのちに諸国を遍歴し行脚して修行し、寛永九年に故郷に石平山思真寺を開創した。慶安元年(一六四八年)には六九才の老体ではるばる江戸に赴き、士民を教化している。明暦元年(一六五五年)六月二五日江戸の神田で死亡した。

彼の仏教を含めた思想全体をよく考察すると、その著しい特色は旺盛な批判精神が到るところにみられるということである。まず彼は古来の伝統的な仏教諸派に対してつねに批判的態度をとっていた。彼は宗派としては曹洞宗に属していたが、宗祖道元の立言に対して痛烈な批判を行なっている。また日本仏教諸宗派の宗祖の権威も認めなかった。このような立場にもとづいて彼の無宗派的性格が成立する。

ついで彼は「自由」ということばを實によく用いている。仏道修行の目的は「自由」を実現することであるという。彼の説く「自由」はむしろ宗教的、精神的な意味のものであって、政治的、社会的な意味の「自由」ではないが、商人の職務は世界の自由を実現することにあるなどと説くところは、極めて近代的な意味の自由の觀念に近ずいている。

進歩的な思想家としての彼はその職業倫理においても、その面目が躍如として認められる。先ず、世俗的な職業生活にひたすら精励することが、そのまま仏道修行であると説いたところに彼の思想の最も著しい特徴が存する。この趣旨を明らかにする為に、彼は「万民徳用」という書物を著わした。この書物において、武士、農人、職人、商人の順に彼独自の職業倫理を述べている。

それでは医者の倫理についてはどのように述べているであろうか。これは、彼の主著たる「万民徳用」にはなく、弟子の恵中が師の側近に随侍して、随聞随記したものを集成して、正三道人をしのぶためにまとめた驢鞍橋の下巻に記されている。すなわち、八十三章に「一日去る医者来たりて、修行の用心を問う、師（正三を指す）示していわく

別に用心なし、医者の仕様を教え申すべし。先ず、我は世界の病人を救えとの天道の仰付也。此の役人ぞと思ひ定め、身心を世界になげうつて、薬代の事をも、何事をも思はず、只天道に任せ奉り、一筋に医を施さるべし。然らば亦命をつなぐ分は、必ず天道のあてがいあるべし、かくの如く勤められれば、機の熟するに従いて、必ず徳あるべしと。」自分は世界の病人を救う役目があると自覚して、身心をなげうつて、薬代の事も何事も考えないで、誠心誠意に治療につくせ。このようにしておれば、自ら食べていけるようになり、徳も出てくると、説いているのである。これが、そのまま今日の我々医者の世界に適應するとは思われないが、自分は世界の病人を救う役目があると自覚せよと述べるころは如何にも正三らしい氣質を如実に示しており、心の問題として大いに傾聴すべき言葉であろう。

次に医療に関する記事が驢鞍橋の上巻に二ヶ所記されている。一つは九十八章に「人毎に餓死ぬ事（かっへ）を嫌うが、是程心安き事なし。食度も二三日の間の事也。其後は機遠くなり、眠り入るようになり、苦みなく安楽に死するなり。総じて、只死ぬは楽と思わるるや。はれて死ぬも苦なり。ひつて死ぬも苦なり。虫にせき殺さるるも苦なり。大熱して

死ぬも苦なり。一つとして安き死なし。万死苦しみ、病苦の堪え難きめにあわんより、中々餓死は楽なることに非ずやとなり。」とあり、もう一つは百三十一章に「一日さる医者来りていわく、某今程、西の久保に不思議なる病者をうけとり、様々治療れども治らず、兎角医術の及ぶところに非ず、なにとぞ御方便ありかしという。師聞いていわく如何様なる病人なりや。彼答えていわく、総身より系筋のようなる虫出で、外よりひる降りかかり、物を飲食す事ならず、昼夜六十日程責められ、半氣違いに成り候と語る。

師聞きていわく、さてもさても不便千万なる事かな。我処に遣わすべし。申らいて取せんずと也。良有いわく、彼様の者を申うことも、機転なくしてかなわす。我は聞くと早申い様出るなり。先ず天徳院え引導を頼み、死人ぶとに成して申い、其後我うけとり、身に経文陀羅尼を書き、塔婆と成して申うべし。塔婆となりたらば、虫も責むべからず、二十七日もかくの如くして申いたらば必ず治すべきなり。申も医者いしやの薬の如し。なまあてがいなればきかぬなり。治せぬ間は、経文をもつてよみ殺す迄も申うべし。是を治さずんば仏法にひけをとるなり。肉身不調の病は薬をもって治す。かように業に責めらるる者は、たとい火を吐き、角を

振り来るとも、手もなく申い直すべしと也。後日に医者、彼病者を遣わす。師前日のたくみの如く、葬礼の儀式をなし、其晩暮六つより四つ過ぎるまで、衆僧取廻して警策をうち、経呪を以て責め、病者には礼拝をさせ申い給え、病者不凶にげ、門前の家へ行き、倒れて前後も知らずふす。師其儘置べしといつて衆をやすめ給う。明朝、彼女走来り、師を礼していわく、虫に責められ、昼夜眠られぬこと、六十日余りなり。今夜始めて前後を知らずふす。今朝は夢のさめたるが如くにして、本の人間になりぬ。さてありがたき御慈悲かな。私の所存はもはや今生は無きものなり。機の違わぬ先に、御殺しありて也とも御申いにあずかりたく存せしに、今生にて再び人間になりぬること奈なき次第なりと、感涙を流し、礼謝して去る。師いわく、始め聞きしときは、人の目に見えて実に虫どもの責むるといいによりて、手もなく申い直すべしと思う。後来るを見れば機病なり。是は隙を取らずと思ひけるが、造作なく直ること不思議なり。総じて直ちに責むるものは、忽ち申いにて直るべし。氣病は治り難かるべしとなり。」

とある。前者は飢餓死が存外、安楽であることを述べたもので、今日から考えても達見である。後者は、いわゆる今

日の神経衰弱と思われる患者を治療する方法を述べ、最後に気病は治り難しと結んでいる。気病とは、精神病患者を指すと考えられる。してみると、正三はこのような病気に對してはかなり深い知識を持ち、治療法もよくわきまえていたことが推測される。これは、彼が修行中に病気に倒れ、いろいろと治療したが回復せず、彼も死ぬことを決心したとき、医者であった弟がこれを聞いて、かけつけた。そして自分の体の様子をみて云うには、薬も何もいらないう。只食養生で十分であると。そのわけを聞いたところ、肉食をしたからいけないという。このようなことは何も言わないのに弟はちゃんとわかったのである。かくして二年程かかって養生によって完全に治すことが出来たというところを驢鞍橋の下巻の十三章に詳しく述べているところから、弟も相当な名医であったと思われ、正三自身も大病を経験しており、また医療について弟からもいろいろと聞いておったのではないかということが推測されるどころから正三の医療の知識も相当なものであったと考える次第である。

ともあれ、正三の思想のうちにはこのように幾多の注目すべき特徴があって、世の注目をひいたが、彼の思想は当

時の一般人には受けいられた。したがって連続的な宗教運動とはならなかった。この直接の原因として近世日本における集権的封建体制が異常に強力であったことと、市民社会の未発展に求むべきでなかるうかということが考えられる。

文 献

(鈴木鉄心編) 鈴木正三道人全集 山喜房仏書林、昭三七

中村元他編 現代仏教名著全集 第八巻 日本の仏教(3)

中村元 日本宗教の近代性 春秋社 昭三九

隆文館 昭三五

Summary

Shosan Suzuki hardly was known on the history of Buddhism. He became bonze from samurai and lived in 1579~1655. The idea of Buddhism claimed by him, had remarkable modern character, and was full of critical spirit. Ethics of profession claimed by him greatly differed from which claimed the average bonze. The present author investigated the ethics of a doctor claimed by him. It was "noted "Roankyō" written by Keichū who was a pupil of Shosan, and was as follows. A doctor must awaken to that I have duty to help patients of the world, and heal the patients with a true heart.

吉川宗元宛前野良沢書状と石川大浪筆ヒポクラテス像

片 桐 一 男

A Letter of Ryotaku MAENO Addressed to Sogen YOSHIKAWA and a Portrait of HIPPOCRATES
by Tairo ISHIKAWA
By Kazuo KATAGIRI

目 次

一、吉川宗元宛前野良沢書状

イ、内容と年代考証

ロ、吉川宗元

ハ、吉川宗元の『五液論』

ニ、江馬蘭齋と『五液診法』

二、石川大浪筆ヒポクラテス像

イ、従来の評価と蘭学史上のヒポクラテス像

ロ、本図の系統と蘭文書き入れ

ハ、蘭文書き入れと吉川宗元

ニ、石川大浪とその作品

三、江戸の初期蘭学界の一面

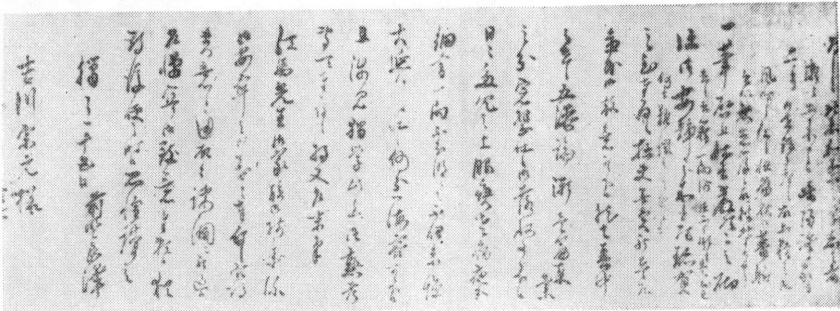
一、吉川宗元宛前野良沢書状

イ、内容と年代考証

先頃開催された蘭学史始百五十年記念展^①には初公開の資料も多く含まれていたが、ここに紹介する蘭医吉川宗元宛の前野良沢の書状および石川大浪の筆になる医聖ヒポクラテス像も衆目を集めた^②。

まず前野良沢の書状を読んでみよう。(句読点等は筆者)

一筆啓上仕候、嚴寒之砌、弥御安静に被_レ成_ニ御座_ニ珍賀之至奉_レ存候、拙夫無異罷在候、乍_ニ慮外_一御放念_{可_レ被_レ下候}、然は春中被_レ遣候五液論漸啻篇成業之_ニ分完壁仕候、御落取可_レ被_レ下候、曰々多冗之上眼疾老病夜分細書一向不分明にて不_レ任_ニ素懐_一大延引仕候、何分御海容可_レ被_レ下候、且浅見独学此上御熟考専_一に奉_レ存候、将又乍_ニ末筆_一江馬先生御家族御揃に成、弥御安寧之御



義と奉_レ存候、右得_ニ貴
 意候通故に疎濶に罷
 過候、乍_レ憚宜く御致意
 奉_レ願候、猶期_ニ後便之
 時一候、恐惶謹言

前野良沢

臘月十五日

吉川宗元様

坐右

尚々此表和蘭之学志之
 者漸々出来申候、崎陽
 訳家も上より御世話御
 座候故出精之由風聞仕
 候、但当秋は蕃舶今以
 無_ニ着岸一候故彼地より
 申遣候書籍一向沙汰不_レ
 承候、是而已何も難渋
 之義御座候、以上

さて、この書状は何年の
 十二月に書かれたのだろ

うか、これを知る手係りとしては、「眼疾老病云」とある
 から良沢の晩年のことと思われる。また「当秋は蕃舶今以
 無_ニ着岸一」といつているから蘭船の入津しなかつた年とい
 うことがわかる。

前野良沢がオランダ語を青木昆陽に学んだのは明和三年
 (一七六六)である。また杉田玄白とともにカピタンの江
 戸参府に随行して来た蘭通詞の西善三郎に会って、オラン
 ダ語につき質問したのは翌明和四年のことである。ついで
 長崎への遊学は明和七年(一七七〇)のことであり、その
 期間は短時日ではあったが、蘭通詞の吉雄幸作や楡林重右
 衛門らについて教えを受け、かたわら、いわゆるターヘル・
 アナトミアその他の原書や参考書をも入手して帰った。こ
 の時を契機に、良沢のオランダ語の知識も豊富となり質的
 にも急速な進歩をみるわけである。以後オランダ通詞との
 交渉も深まり、舶載蘭書の入手についても依頼することが
 多かったことと思われる。蘭書の入手を通詞の斡旋に頼っ
 ていた事情については本状の行間にもよく現われている。

良沢の没年は享和三年(一八〇三)十月十七日で行年八
 一才であった^④。してみると、本書状の書かれたのは良沢の
 長崎遊学明和七年(一七七〇)から享和三年(一八〇三)

までの三三年間のうち蘭船の入津をみなかった年というように限定される。すると、天明二年（一七八二）、寛政三年（一七九一）と寛政八年（一七九六）の三ヶ年に当る。この三ヶ年は良沢の年令でいえば、六〇才、六九才、七四才となる。

そこで、書状の文中「眼疾老病夜分細書一向不分明」とある点を考え併せてみると、天明二年（六〇才）にあてるよりはむしろ寛政三年（六九才）か同八年（七四才）のどちらかの年と思われる。ひとまず寛政三年か八年と仮定して、次には、やはり書状の文中「和蘭之学志之者漸々出来申候、崎陽訳家も上より御世話御座候故出精之由風聞仕候」とあり、特に「崎陽訳家も上より御世話御座候」という点に注目すれば、これは老中松平越中守定信の執政を反映していることは明らかである。すなわち、定信は祖父將軍吉宗の遺志を果すべく、寛政の治をはかった人である。宝暦曆修補事業に関しても積極的に意を用い、まず長崎の阿蘭陀通詞の天文学者と、幕府天文方を用いて努力が払われた。そのために良永本木仁大夫が幕命により天明八年、（一七八八）『阿蘭陀永統曆和解』を完成上呈した^⑤。また吉宗以来の懸案解決には、更に月と太陽に対して精密な位

置推算が行える方法が必要であり、五惑星の位置予報も要求されるところであった。この線に沿って本木仁大夫は寛政三年（一七九一）十一月には『天地二球用法記』の和解御用を命ぜられたのである^⑥。これはのち『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』として呈上されたのであった^⑦。また翌四年（一七九二）には魯国船が北海の根室港にあって漂民幸大夫・磯吉らを返し、通交を求め、幕閣を悩ませた。定信は周密な思慮と機略にとんだ訓令をもって魯船を返し、一応当面の難関を突破したが、警備体制と海外事情の調査に留意することとなった。そんな意味も含まれてか、定信は同年幕医桂川甫周の弟にして蘭学者森島中良と長崎蘭通詞出身石井庄助を自藩に禄仕させ、翻譯ならびに著録の手助けとさせたのである。寛政五年（一七九三）には桂川甫周の『魯西亜誌』^⑧の訳が出来、前野良沢も『魯西亜本紀同大統略記』を物し、翌六年には甫周の『北槎聞略』^⑨が出来ている。更に七年（一七九五）には長崎の志筑忠雄は『魯西亜志附録』^⑩を訳し、国じく通詞吉雄幸作の『魯使北京紀行』^⑪などが出来たのは、幕府いや我國の直面している難事がいかに重大であるかを物語ってあまりある。そしてついには寛政九年（一七九七）長崎蘭通詞吉雄幸作・楢林重兵

衛・西吉兵衛等が蘭書和解掛を命ぜられ、併せて少年訳司の試業を規定せられるにいたった。^⑩このような諸事情から判断すると、先に注目した「崎陽訳家も上より御世話御座候故出精之由風聞仕候」と良沢にいわしめる背景には、実にこのような諸事情があったのである。してみるとこの書状が認められたのは寛政三年（一七九一）の蘭船欠航年よりはむしろ寛政八年（一七九六）の欠航年にあてての方が順当である。勿論先に保留しておいた天明二年（六〇才）は完全に論外にしていることがわかる。よって本書状は寛政八年（一七九六）良沢七十四才の臘月十五日付で吉川宗元に宛てられたものとなる。

口、吉川宗元

前野良沢の書状の宛先である吉川宗元については知られるところ少なく、わずかに、大垣市史中巻（学芸史）の吉川広簡の項で「宗元は田町に住す。病身にして家を弟広簡に譲り、子敬周（後名を宗元と改む）と妻を之に托し、大運寺の僧徳本の弟子となり、念仏三昧にて世を終る。」^⑪とみえているにすぎない。蘭学や蘭方医術のことについては全く触れていない。しかし早稲田大学図書館にある寛政十年十一月二十六日付の蘭学者の相撲番附^⑫には東方前頭二枚目として、西

方の岡田甫説に対している。ちなみにこの番附は蘭学者中でも指導的地位にあった大槻玄沢が、家塾芝蘭堂で、江戸の蘭学者を招いて太陽暦の元旦いわゆる和蘭正月なる祝宴を催した際、余興として作成されたものとみなされている。位づけからはあたかも蘭学者たちの斯学界における地位を推察することが出来てすこぶる興味深い。それには勸進元が大槻玄沢、同差添が桂川甫周で前野良沢と杉田玄白は年寄の格になっており、立行司は朽木昌綱（福地山侯）で桐山正哲、今井松庵、石川玄常、松平忠和（桑名侯）、吉益要人、安東一庵、建部清庵、桂川甫齋、中川仙安らが行司を勤めている。そして、東西両側に、各一名の張出力士（星野良悦と檜林重兵衛）があり、各四段に三役、前頭が連記されているが、横綱及び幕下以下の記載はない。この番附面に記載されているのはすべて八〇名である。だから吉川宗元は当時斯界においてかなり上位にあったことが理解される。ちなみに小論中に登場する人物と関係蘭学者の位付をみれば、杉田伯元東前頭一枚目、江馬春齡（蘭齋）東前頭四枚目、江沢養寿（樹）西前頭十一枚目、嶺春泰西前頭十三枚目、石川七左衛門（大浪）西前頭十七枚目といった状態である。

八、吉川宗元の『五液論』

次に、前野良沢の書状中の「然は春中被_レ遣候五液論漸
老篇成業之分完璧仕候、御落収可_レ被_レ下候、日々多冗之上
眼疾老病夜分細書一向不分明にて不_レ任_三素懐_一大延引仕候
何分御海容可_レ被_レ下候 且浅見独学此上御熟考專一に奉_レ存
候」という項を検討してみたいと思う。この部分は、本書
状中において主たる要件を述べた部分である。右の文から
判明することは、この年の春に吉川宗元から前野良沢に送
つて来た「五液論」なる原稿の完成第一篇分を大延引なが
らようやく終ったから返却いたすので受けとっていただき
たい。というものである。してみると、吉川宗元に『五液
論』なる業績があつて、少なくともその第一篇は右にみた
ごとく、寛政八年（一七九六）のこの年前野良沢から校訂
ないしは校閲を受け終ったことを意味するのである。^⑤従来
吉川宗元の伝が不明であつたと同じように彼の業績に『五
液論』のあつたことなど全く知られていなかったことであ
る。

二、江馬蘭齋と『五液診法』

五液論というただちに想起されるのは、江馬蘭齋が訳
した『五液診法』文化十三年刊である。これは Buysen の

Practijk der Medicine によつたもので、内容は尿の検査
法等を述べたものである。^⑥

ところで、実はこのホイセンのプラキテーキをめぐつて
興味深い関係が存在する。概略整理してみると次の通りで
ある。

すでに、前野良沢の主君である中津藩主奥平昌鹿は前野
良沢に裴仙 Buysen のプラクテキー Practijk der Medi-
cine を買い与えたのであつた。^⑦しかし良沢にこれが訳述の
あるのを知らない。ところが、良沢の弟子の江馬蘭齋には
前述の如き文化十三年（一八一六）刊行した『五液診法』
がある。^⑧思うに師良沢が弟子蘭齋にその訳述をすすめると
ころがあつたといえよう。さらにまた、前野良沢・杉田玄白
らとともに解体新書の訳述事業に参加した高崎藩医嶺春泰
（一七四六—九三）にも裴先の『五診法』というのがあつ
て、これは春泰が訳述の業なかばでたおれたため未完成に
終つた。^⑨嶺春泰の歿年は寛政五年（一七九三）十月六日四
十八才の若死であつたが、ちょうどこの年は江馬蘭齋が当
時四十七才で笈を負い出府して良沢の門に入った年にも当
つている。そしてこの嶺春泰自身もまた墓碑銘に誌す如
く、前野良沢に師事して蘭語を学び『五診法』の訳述に手

を染めた間柄であった。してみると、これはどうしても、前野良沢が自身でなし得なかったところを、その門下の嶺春泰にすすめ、春泰が業なかばにして逝ったので、江馬蘭齋に依嘱するところとなったものようである。そこで、先に推論しておいた吉川宗元が、前野良沢の門弟の列に加わっていたことが事実とするならば、まず嶺春泰の業が中断した時に吉川宗元に依嘱するところがあったのではあるまいか、さすれば先に引いた寛政八年の良沢から宗元に宛てた書状の文言が、いきいきとわれわれの眼に映り、理解されるのである。思うに、この吉川宗元の業も完成をみなかったであろう。そしてそのあとを同じく大垣藩医として同門の江馬蘭齋が引きうけて完成したのである。これが刊行は文化十三年であったことは、すでに述べた通りである。再整理してみると、

1 前野良沢は自身でなし得なかった *Brysen* の *Practijk der Medicine* の翻譯を門人の高崎藩医嶺春泰にすすめた。

2 嶺春泰が業なかばにして寛政五年に逝ったので、良沢はやはり門人の大垣藩医吉川宗元にこの業をすすめた。

3 吉川宗元の翻譯の業は寛政八年には少くとも第一篇は完成していた。しかしその後完成をみずに病身な彼もまた逝ったものと思われる。

4 そこで、良沢は三たび門人にして同じく大垣藩医の江馬蘭齋に、その業をすすめたものと思われ、彼によって完成され、文化十三年にいたって上木されたのであった。

二、石川大浪筆ヒポクラテス像

イ、従来の評価と蘭学史上のヒポクラテス像

前記吉川宗元宛の前野良沢書状を、蘭学事始展出陳のため、借用に伺った折、種々談話のあとで、吉川康雄医博は代々伝わった、ただ二本の軸として、前野良沢の書軸の外にもう一本古いものがあるとして出して下さった。従来これらの軸を披見された方は幾人かあったわけで、前野良沢の軸は、前野良沢関係の数少い珍品として、みる人の注目をひいているのに反して、他の一軸はいかにも異様な西洋人の肖像で、しかも下にわかりにくい横文字のあることから関心のからはずれていた模様である。²²⁾

ところで、この軸を披見するに及んで、私は非常に興味を憶えた。肖像は明らかにヒポクラテスの像である。ヒポ



クラテスの像は西洋における医聖として、あたかも東洋における神農神を祭る如く、蘭方医が好んでその像を画家に模写せしめ自らも描き、座右に掲げて自らの業の指標としたのであった。それ故にヒポクラテスの名とその生涯について蘭方医、蘭学者の関心度は高く、たとえば、寛政六年（一七九四）和蘭商館長 Mr. Gijbert Hemmi とその一行が江戸参府をした際に、宿所長崎屋へ江戸の蘭方医達が面談に赴いた。その五月五日の条に、石川元徳が「彼土医

家ノ名哲ヲ問」うたのに対して Hippocrates と Galenus および Erasistratus の三名医の名をあげたのであった。とんで寛政十年（一七九八）三月に再び Mr. Gijbert Hemmi の一行が参府に東上して来た際の三月二十五日面談に赴いた時に、今度は大槻玄沢が

前哲「イボカラテスは」厄勒齊亞人ノヨシ今ヨリ何百年前ノ人ニシテ「ホールナム如何」

と、問うたが、不幸にして、随員筆者の Leopold willen Reiss は「暫時考思シテ共ニ臆記セストイフ」といった具合で、満足な答は得られなかった。このように蘭学者たちはヒポクラテスについて関心の度が高かったように察せられるのである。また同じく寛政六年閏十一月十一日、西暦一七九四・一・一、大槻玄沢（三十八才）が社中の蘭学者を自宅に招いて、いわゆる「おらんだ正月」の賀宴を催した際、床ノ間にヒポクラテスの画像が掲げられた。これはちょうど漢方医者が冬至に神農祭をやるのと同じように蘭方医達が西洋の医祖と仰ぐヒポクラテスを祭る意味も含まれていたのであって蘭学史上記念すべき文獻であり、最も象徴的な作品でもある。同様、蘭学者がヒポクラテスの像や贊を書いた例のうちで年代のわかっているものだけを管見

の範囲で列挙してみれば、およそ次の如くである。

- 1 寛政十一(一七九九) 石川大浪模写、大槻磬水医聖伝を書す。²⁸⁾
- 2 大浪は更に一幅描いて吉川宗元に贈る。²⁹⁾
- 3 文化八年(一八一二)(石川大浪) Tafel Berg 筆像(右向)。³⁰⁾
- 4 文化十三年(一八一六) 桂川甫賢国寧写像(右向) 漢蘭両文の賛あり。³¹⁾
- 5 文政六年(一八二三) 源秀飛画像(右向)。京都の蘭方医小森桃場の蘭漢両文賛。³²⁾
- 6 文政三―六年頃、森田千庵筆像(正面)。³³⁾
- 7 天保二年(一八三一) 辻蘭室筆(当時)像。³⁴⁾
- 8 天保九年(一八三八) 桂川甫賢筆像(右向) 図下に甫賢の漢文題詞あり。³⁵⁾
- 9 天保十年(一八三九) 宇田川裕庵家藏銅版画像(右向)。³⁶⁾
- 10 天保十一年(一八四〇) 坪井信道。³⁷⁾
- 11 この年渡辺崋山筆「加羅哲斯図」。³⁸⁾
- 12 安政三年(一八五六) 牧田水石画(右向)、安政五年(一八五八) 杉田信成卿の賛あり。³⁹⁾

もって、当時、蘭方医家の間に如何に敬信の念を以て受け

いれられていたかが理解されよう。

口、本図の系統と蘭文書き入れ

ところで、吉川康雄医博所蔵の水墨画ヒボクラテス像は、

その図柄が、向って右向で天保十年(一八三九) 宇田川裕

庵自筆のヒボクラテス銅版画と、安政三年(一八五六) 古

河の牧田水石の筆になる肖像と相似であって、一見して同

系統の模写であることがわかる。⁴⁰⁾

次に本図の下に不鮮明な筆蹟で蘭文書き入れがあり、か

らうじて次の如く読みとれる。

HIPPOCRATES COÛS

In Grieken Land.

Getekent in q'uanseij 11, door M: Tairew

ハ、蘭文書き入れと吉川宗元

改めて本図の蘭文書き入れを検討してみよう。

HIPPOCRATES COÛS. In Grieken Land. は周知の

如く、「ヒボクラテス カウス、ギリシヤの」という意

味で問題はない。次は、Getekent in q'uanseij 11, door

これも「寛政十一年に画かれた。」という意味でさして問

題はない。最後は door M: Tairew である。これは何と

理解したらよろしかろうか。そこで結論的に私見を先ず披

握すれば、「大家大浪によって」と、読みとるのである。

doorは蘭語で著者名や作品の作者名を表記する際に「door誰々」と書くから「によって」とか「による」という意味である。M:はMeesterの省略であらうと思ふ。Mijnheerともとれるが、通常は、共にMrと略され、まゝM:と書かれることもある。ここではMeesterの略M:と受け取りたい。その意味も主人・名人・先生とかあるがやはりここでは大家くらいが一番落ち付くかと思う。Tairewが一番問題である。先にもいった如く、私は石川大浪の大浪を蘭語の発音に準じて表記したものと読みとる。そして、このdoor M: Tairewの書き方からしてヒポクラテスの像を模写した石川大浪自身が蘭文流に署名したのではなくて、この図を模写してもらった吉川宗元がdoor M: Tairewすなわち「大家大浪によって」と記念して書き入れたものに相異なる。

ところで、寛政十一己未（一七九九）八月には前野良沢杉田玄白の共通の弟子にして蘭学の大家大槻玄沢が、石川大浪に頼んでヒポクラテスの像を模写してもらい、自らはその図の上部にヒポクラテスの伝を書いているのである。

その文は『磐水存響』にも収録されており、^⑧「兮撥哈拉貼

斯伝、寛政己未八月」と題して、冒頭に「兮撥哈拉貼斯可^ウ鳥斯者。厄勒齊巫人」と始まっており、まゝにHIPPOCRATES COÛS In Grieken Land. に相当する。そして、その文に附記して玄沢は「……今茲寛政己未歲……請大浪子、模写……」と明記しているのである。

右の大槻玄沢が石川大浪に頼んで模写してもらったヒポクラテス像の上部にその伝を書いた一幅は未見であるが、おそらく吉川宗元に依頼されて模写して贈った吉川家現存の一幅と同じ様図であると信ずる。思うに石川大浪は大槻玄沢および吉川宗元と親しい間柄であったのであろう。

二、石川大浪とその作品

ヒポクラテス像の筆者石川大浪（宝曆十二—文化十四年十二月二十三日、享年五十六才）は通称石川甲吉のちに七左衛門といい、名は乗加、源姓、字は啓行、大浪（又大蠟にも作る）と号し、別に薫松軒、七机山とも号した。号の大浪はマテオ・リッチの『万国輿図』にアフリカ喜望峰近くに大浪とあるより採り、ターヘルベルク Tafelbergなる蘭名をも用いたが、これは同じくケープタウン近傍のテーブル山をもじったものといわれている。身分は幕府直参の大番与力で江戸本所立川・石原・浜町などと居住した模様で

大坂に勤番のこともあった。なかなか文雅の士で、油絵などもよく描いた人である。したがって交際範囲も、かなり広がったようにみうけられる。ことに洋名を用い、油絵を描くという異国的な彼の人間要素は、彼が交際をもった蘭学者達から吸収するところ頗る多大であった。そのことは彼の遺品の画題からも容易に理解されるところであって、その画技が高度なものであったことを、以下管見の範囲で作品や関係記録を整理してみたい。

1 明和七年以後天明三年（一七八三）以前、前野蘭化翻譯の『仁言私説』を筆授されている。^⑧

2 寛政八年（一七九六）一七二五年にウィルレム・フアン・ロイエンが描き、徳川吉宗が施与した羅漢寺所蔵の花鳥二幀のうち一幀を弟の孟高と共に、五日間通って模写した。^⑨

3 寛政己未（十一年・一七九九）八月、大槻玄沢の依頼により医聖ヒポクラテスの像を模写す。玄沢はその図上に「兮撥哈拉貼斯伝」を賛した。^⑩

4 寛政四年（一七九二）山村才助の引語のある大槻玄沢著訳『蘭腕摘芳』（文化十四年一八一七刊）の挿画を描く。

5 寛政八年（一七九六）成稿の大槻玄沢の著訳『蕨録』（文化六年一八〇九刊）の挿画を描く。

6 寛政十一年（一七九九）ヒポクラテスの像を模写して吉川宗元に贈る。宗元はその図の下にHIPPOCRATEFS COÛS, In Grieken Land. Getekent in q'auanseij 11, door M: Tairew と記入した。

7 享和三年（一八〇三）刊。『聚珍画帖』と題し、狩野探幽の絵を模写して上木したもの。^⑪

8 文化七年（一八一〇）杉田玄白七十八才の肖像を描く。のち『形影夜話』の巻頭に掲載される。

9 文化八年（一八一二）再び杉田玄白の座像を描く、絹本に極彩色、晩年の玄白の面影真に迫るものあり。玄白は文化九年元日八十才の迎春を記念して自ら賛を加えた。^⑫

10 文化十四年（一八一七）田原藩医家加藤玄亀の随筆『我衣』の二月二十六日の条に「石川七左衛門殿（御番本郷立川住居）此節大坂に勤番たり。其方より申し来りし怪説、渡辺華山予に語るは」とあり、華山との交渉も推測される。^⑬

11 年代不明なれど、古河、鷹見家の所蔵にかかる『浜

田兄弟ノ台湾ニ於テ阿蘭太守ヲ捕フル図」紙本着色

(原図はフアレインタイン著『新旧印度志』第四篇にあり)一枚。⁴⁰⁾

三、江戸の初期蘭学界の一面

以上、吉川家代々の珍藏に係る前野良沢の書状と石川大浪のヒポクラテス像が蘭学史上に占める意義をいささか追究してみたわけである。その結果、期せずして江戸における初期蘭学者の一群が登場し、彼等が払った努力と、相互に温めあった交際の一斑を読み取ることができた。最後に注目すべき諸点を整理のうえ、列挙して擱筆したい。

1 吉川宗元宛前野良沢書状は寛政八年(一七九六)良沢七十四才の十二月十五日付のものである。

2 ヒポクラテス像の筆者は石川大浪であり、受贈者の吉川宗元の蘭文記入により寛政十一年(一七九九)のものである。この年大浪は同じくヒポクラテス像を大槻玄沢にも描き贈り、玄沢はそれに医聖伝を賛している。

3 江戸における蘭学者が泰西の進んだ科学を吸収する方法の中でも、むしろ主要な方法の一つとして蘭書の入手が挙げられる。前野良沢の書状によれば、長崎遊

学以来交際を保った崎陽の阿蘭陀通詞に依頼して年々入津の蘭船が舶載する書籍を取り寄せているのであって、更に門下生や知友のためにも労を惜しんではいない。このような方法でも、年とともにかなりの部数がある。このような方法でも、その様子は、例えば前野良沢・杉田玄白共通の弟子である大槻玄沢が天明三年(一七八三)撰述の蘭学階梯の中で、「住々舶来ノ群籍諸家秘蔵スル所ニシテ余等既ニ目撃スルモノ数十部ニ及ブ、近来吾輩翻譯ノ業ヲ起スノ際訳家ヨリ請ヒ受テ各々家蔵スルモノ亦少カラズ」と⁴¹⁾いっていることから容易に理解することができる。

4 前野良沢が主君奥平昌鹿より与えられたボイセンのプラクテーキの翻譯をめぐって、良沢は弟子の嶺春泰にその翻譯をすすめ、春泰が業なかばにしてたおれたので、次に吉川宗元にその業をすすめ、寛政八年(一七九六)には少くとも第一篇は完成していた。しかし病身な宗元も業なかばで逝ったので、同じく大垣藩医にして門人の江馬蘭齋に依頼し、蘭齋によって完成され、上木は降って文化十三年になされたもの。とその経緯が推察できる。

5 大垣藩医吉川宗元の伝は従来全く不明であり、ただ寛政十年（一七九八）の蘭学者の相撲番附に東前頭二枚目という高位にあるところから、初期蘭学界において名の聞えた一人と推測されてきたが、本論において明らかな如く、彼には翻譯の業績があり、学問的には前野良沢の系統に属していること。併せて同藩の江馬蘭齋や幕臣にして洋画家の石川大浪とも親交のあったことがわかる。

6 大垣藩には吉川宗元や江馬蘭齋がおり、江馬家が代々医を以って栄え、吉川家も宗元の弟に広簡、子に敬周（後改宗元）と続いて名が聞えた。更に同藩からは藩医江沢養樹、その嫡子宇田川榕庵を出し、その榕庵が自筆の賛を入れている銅版画ヒポクラテス像は石川大浪の描いたヒポクラテス像と同じ構図であって、なにかしら学問的系譜を象徴しているかのよう思えてならない。また同藩医飯沼長頭の嗣飯沼慾齋を輩出させるなど、各人の業績とともに大垣藩の蘭学もまた注目し値する。

7 幕臣にして蘭学に手を染め、洋画をよくした石川大浪は、その遺された作品からだけでも江戸における蘭

学者連と比較的広範囲に親交があった。すなわち、前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢、吉川宗元らとともに鷹見泉石や渡辺華山らとも交際のあったことが推測される。

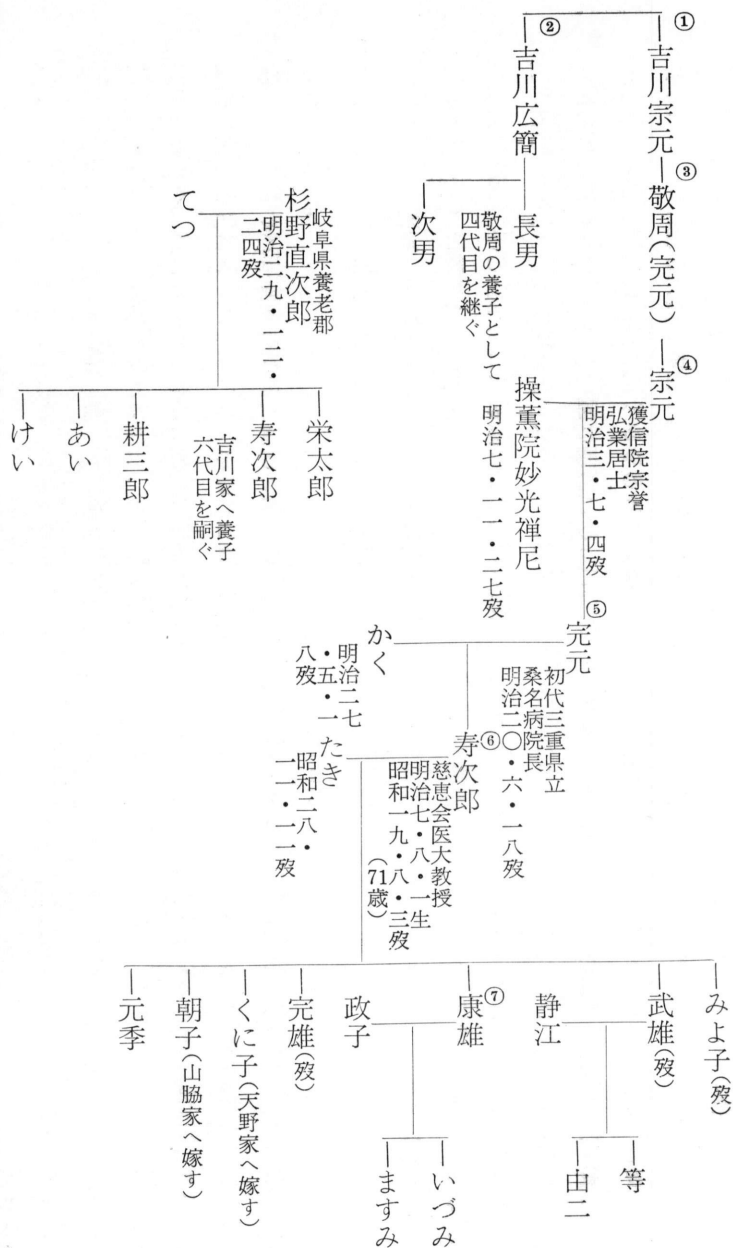
8 以上の諸事項から少くとも前野良沢、杉田玄白、吉川宗元、江馬蘭齋、大槻玄沢、石川大浪らは相識にして、あるいは師弟、あるいは社友として往来のあったことがわかる。

附記

本稿は昭和四一年三月五日日本医史学会例会で発表したものを増補したものである。成稿後、吉川康雄博士の調査と御教示により、本稿の吉川宗元を中心にした家系図を完成することができたので、ここに筆を加えて本稿の内容を助けることとする。貴重な史料の貸与写真掲載の許可ならびに調査の労をもって筆者を助けて下さった吉川康雄医博士には深甚なる謝意を表す次第である。また名古屋市の広徳寺住職吉岡祖禪師の御好意に対しても深く感謝の意を表したい。

一九六六・六・一九成稿

吉川家系図



① 文化十二年(一八一五)杉田玄白の『蘭学事始』成稿から一五〇年を記念して、昭和四〇年(一九六五)七月二十八から八月一日までの五日間、日本橋三越本店七階ギャラリーで蘭学事始百五十年記念会と朝日新聞社共催のもとに「蘭学事始百五十年記念展—明治文化の源流としての蘭学時代—」が開催された。

② 吉川康雄医博(埼玉県草加市在住)出品。

③ 岩崎克己『前野蘭化』昭和十三年、一七三頁。

④ 岩崎克己、前掲書、四九五頁。

⑤ 渡辺庫輔「阿蘭陀通詞本木氏事略」の本木仁太夫良永の項(『崎陽論攷』昭和三十九年、一五一頁)。大槻如電原著、佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』昭和四十年、二五五頁。

⑥ 佐藤栄七、前掲書、二六五頁。

⑦ 佐藤栄七、前掲書、二七四頁。

⑧ 佐藤栄七、前掲書、二七一頁。

⑨ 佐藤栄七、前掲書、二七五頁。

⑩ 佐藤栄七、前掲書、二八〇頁。

⑪ 佐藤栄七、前掲書、二八〇頁。

⑫ 佐藤栄七、前掲書、二八九頁。

⑬ 『大垣市史』昭和五年、中巻(学芸史)四三二頁、吉川広簡の項。

⑭ 岡村千曳『紅毛文化史話』昭和二十八年所収の「寛政時代の洋学者番付二種」三一—九二頁に詳しく解説され、巻頭には写真版も挿入されている。

⑮ 前野良沢と吉川宗元との関係は早稲田大学の洋学者番付か

らわかるごとく、蘭学界において良沢の方が宗元よりはるかに上位で、良沢は年寄、宗元は東前頭二枚目であった。

⑯ 藤井尚久「明治前本邦内科史」(『明治前医学史』第三卷一九五六所収、一〇〇頁)。

⑰ 杉田玄白『蘭学事始』および岩崎克己『前野蘭化』中「ボイセンのプラクテーキ」にも詳述。

⑱ 京都大学富士川本、二冊、蘭・軒方救速暴伊先著、江馬蘭齋(元恭)訳、文化一三年。大小便による診断の部分全訳したもの。ちなみに、五液とは、小便、大便、汗、涎、嘔吐等の排泄物を指すのであって、それによる診断法を記述したものの。

⑲ 佐藤栄七、前掲書、二七四頁。

⑳ 佐藤栄七、前掲書、二七四頁。

㉑ 吉川宗元と江馬蘭齋とは、相撲番付に東の前頭二枚目および四枚目とみえるところから、宗元の方が蘭齋よりも技量、年齢が上であったのではなからうか。しかし、大垣市史は宗元が病身であったと記している。もって業なかばで逝ったことは多分にありうる。

㉒ 前野良沢書状の方は、昭和三十九年五月二六—二八日、東京大学図書館で日本医事新報社主催、日本医史学会協賛のもとに開催された「医家先哲遺墨展覧会」にも出陣され、目錄にも二二番目に載せてあるが、宛先の吉川宗元についての解説はない。なおこれは、後日(昭和三十九年六月六日)日本医事新報に写真が掲載されている。また内山孝一博士の箱書と読みがっているが、若干の誤謬がある。これに反して同家のヒポクラテスの肖像は従来識者の注目をひく機会と認識

を得ていなかった。

②③ 大槻玄沢『西賓対晤』(静嘉堂文库所蔵)。

②④ 大槻玄沢、前掲書。

②⑤ 大槻玄沢「磬水漫草」(「磬水存響」所収)。

②⑥ 吉川康雄医博所蔵。

②⑦ 茅原元一郎・弘氏所蔵。紙本墨画。幅の上部にヒポクラテスの閨歴を述べた蘭文題詞があり、筆者は蘭通詞吉雄権之助で、幅の旧蔵者は、題詞によって、浪華の蘭学者斎藤方策であることがわかる。

②⑧ 佐伯理一郎氏旧蔵。医譚第九号、昭和十六年六月。

②⑨ 今日の医学 第六卷 第三号附録。

③⑩ 蒲原宏「越後にみられるヒポクラテス像について」(日本医事新報一六五四号昭和三十一年一月七日)。

③⑪ 茅原元一郎・弘氏所蔵。紙本淡彩、蘭文題字。

③⑫ 呉秀三旧蔵、茅原元一郎・弘氏所蔵。絹本水彩。

③⑬ 茅原元一郎・弘氏所蔵。紙本銅版。像の上方に題詞あり。題詞も銅版。本図の銅鑄者は京都の人、玄々堂松田儀平と考

えられている。またこの銅版画は小川政修『泰西医学史古代中世編』および岩波文庫『ヒポクラテス古い医術について』にも口絵として掲載されている。

③⑭ 茅原元一郎・弘氏所蔵。紙本墨書。漢詩のみ。

③⑮ 森銃三『渡辺華山』創元社。昭和三十六年。所載。

③⑯ 茨城県古河市、河口信広氏所蔵。川島恂二医博「杉田信、

枚田水石作『ヒポクラテス画像』を巡って」蘭学資料研究会研究報告第一五八号一九六四年四月十八日。

③⑰ 詳細なる考証と関連の追究は稿を改めて試みたい。

③⑱ 大槻茂雄編『磬水存響』大正元年、坤、七五―七七頁。

③⑲ 石原明博士は山村才助自筆の『仁言私説』を所蔵されている。また岩崎克己『前野蘭化』にも収録。

④⑩ 大槻玄沢の『磬水漫草』に寛政八丙辰年十一月の「題石川太浪模写油画」なる賛文がある。また『嘉永以来西洋輸入品及参考品目録』にも掲載。古賀十二郎『長崎絵画全史』昭和十九年、所収の「羅漢寺所蔵に係るファン・ロイエンの画」なる論文にも詳述してある。

④⑪ 前掲『磬水存響』坤、七五―七七頁。

④⑫ 早稲田大学図書館所蔵。

④⑬ 早稲田大学図書館所蔵。

④⑭ 森銃三『渡辺華山』

④⑮ 『嘉永以前西洋輸入品及参考品目録』明治三十九年。東京帝室博物館。

④⑯ 大槻玄沢『蘭学階梯』二巻。書籍の項。(『文明源流叢書』第一所収)。

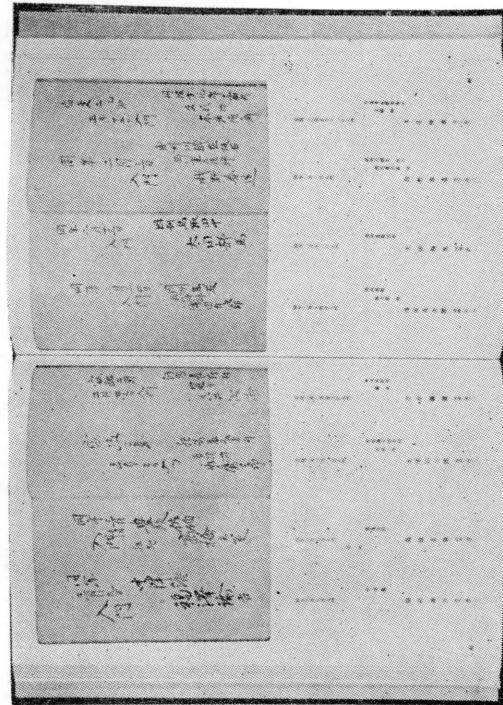
Summary

Here is a letter of Ryotaku Maeno, a scholar of Dutch medicine, of Nakatsu clan addressed to Sogen Yoshikawa, another scholar of Dutch medicine, of Ogaki clan. Dated December 15, 1796 (8th year of Kansei period), it was written when Ryotaku was seventy-four years old and shows his effort to import Dutch books through the good offices of Dutch inter-

preters in Nagasaki. It is also learned from the letter that Ryotaku had his disciples Shuntai Mine, Sogen Yoshikawa and Ransai Ema translate Buijsen's *Practijk der Medicine*. Unfortunately, however, Shuntai died with his translation unfinished and Sogen also died of illness after completing only the first chapter. Ransai alone completed the whole work and published it in 1816 (13th year of Bunka period).

Tairo Ishikawa was a Shogun's retainer who painted well. The portrait of Hippocrates, founder of western medicine, was produced in 1799 (11th year of Kansei period) and presented to Sogen Yoshikawa. In the same year, Tairo presented Gentaku Otsuki, a scholar of Dutch medicine, with a similar portrait. Tairo had acquaintances with Gempaku Sugita, Sen-seki Takami and Kazan Watanabe, and also with Shuntai Mine, Sogen Yoshikawa, Ransai Ema and Gentaku Otsuki who were all disciples of Ryotaku Maeno. Gentaku was also a student of Gempaku Sugita, All the people so far mentioned were the members of the Society of Rangaku Scholars in Yedo and their active interchange was of great significance in the cultural history of Japan.

写真は緒方洪庵適々齋藝 姓名録本文の一部
紹介は本誌三十三頁参照



「白鳥雄蔵種痘之書」について

——中川五郎治の種痘法に関連して——

弘前大医学部麻酔科 松木明知

“Paper on vaccination” described by Yuzo Shiratori

AKITOMO Matsuki

Department of Anesthesiology

School of Medicine, Hirotsaki Univ.

1 はじめに

2 白鳥雄蔵の事蹟

3 「白鳥雄蔵種痘之書」

4 おわりに

1 はじめに

ジェンナーの発見した種痘法がわが国に移入将来されたのは次の二つの経路による。

(一)は古くから海外と頻繁な交渉があり、鎖国令が実施されてからは、わが国の唯一の門戸であった長崎を通じて齋らされた南方系とも称すべきいわゆる長崎系の種痘法であり、蘭館医オットー・モーニケや鍋島藩医植林宗建ら

がタビアから痘漿の移入に奔走し、緒方洪庵、日野鼎哉らが全国各地への普及に尽力したことは広く知られている。これは嘉永年間のことである。

(二)は、これより約二十五年も以前の文政七年(一八二四)に、遠く江戸を離れた辺陲の地松前^①では、中川五郎治によってロシアから齎らされた牛痘法がすでに実地に行われて成功していたのである。

これが北方系の種痘法である。それまで日本の杏林界を支配していた漢方医学が幕末に急に衰微して、これに代って西洋医学が台頭した最も大なる理由は種痘の普及にあることを考慮する時、種痘の歴史の医学史上に占める位置が

極めて大きいものと考えられる。

最近筆者は秋田で中川五郎治の種痘法を直接伝える文献を見つけた。

これは五郎治の第一の弟子である白鳥雄蔵が学んだ内容を書きとめておいたもので、以下その全文を紹介したい。

2 白鳥雄蔵の事蹟

わが国の外来文化移入の経路を尋ねて見るにすべて南の長崎方面から入ってそれが漸次北進していったことは数多くの具体例によって知られる

この中で種痘法については南北から伝えられ、とくに北方系とも称すべき中川五郎治の伝えた種痘はその弟子白鳥雄蔵によって本州の秋田に齎らされたのである。しかしこれ以南に普及しなかったのは非常に残念である。

ロシアに抑留中、五郎治は医師について種痘法を学んだが、今日に至るまでその詳細は知られていない。というのが五郎治の実施した方法を直接に伝える文献がなかったからである。

もちろん井上宗端の「露西亜伝牛痘種痘之記」^②、松本胤親、熊坂宗齋の言、さらには五郎治が持ち帰った種痘書を幕府のオランダ訳官馬場佐十郎が翻訳した「露西亜牛痘全

書」(原題は「蓮花秘訣」を利光仙庵が嘉永三年に改題して出版した)によってほぼその大略は知られるのであるが、いずれも間接的に伝えるものであり、実際にどのような方法に依ったかは分明ではない。

白鳥雄蔵は函館の豪商の次子といわれ、医を学ぶため天保十年頃つまり二十八才頃に秋田の儒医齋藤養達の門に入った。

齋藤養達は古医方の大家で長く医学館の頭取を勤め、また私塾を開いて子弟の教育に努めた^④。門人は二百五十余人に達している。

雄蔵は幼時すでに五郎治より種痘を受け秋田に往った時にはすでに十分種痘の術を会得していたと思われる。

雄蔵は養達について医を学ぶ旁ら、痘瘡の流行に困窮していた藩医に種痘の卓絶した効果を説き広く領内一円に普及実施することを建言したのである。

先見の明のあった齋藤養達はこれを容れて、臼井禎庵、齋藤元益、石川玄長らの藩医は雄蔵について種痘の實際を学び、天保十五年(一八四四)には雄蔵と共に領内一円を廻郷種痘し、甚だしい痘瘡の猖獗から住民を救ったのであった。

日本において多数の住民を対象にして藩命によって広く種痘を実施してしかも相当の効果を挙げたのは雄蔵らの事蹟をもって嚆矢とするものである。

白鳥雄蔵の行った種痘法は「白鳥雄蔵種痘之書」によってその大要が知られる。

この書は筆者が秋田に白鳥雄蔵の事蹟を尋ねた際に偶然見つけたものであるが、残念ながら雄蔵の自筆ではないがこの内容を検討して見るに史料として十分に信拠出来るものと考ええる。

本書はわずか数枚のものであるが、「白鳥雄蔵種痘の書」と題しており、その左に「松前中川五郎治ヨリ伝授白鳥雄蔵」と記してある。記事の年代についてはこれを知らない。

次にその全文を記す。なお版心に酔月堂とある罫紙二枚半に記されていることから、秋田の郷土史家真崎勇助が筆写したものであることが判明するが、原本は未だその所在を知らない。

また「白鳥雄蔵種痘之書 秋田種痘の始り」という題箋が付いているが「雄蔵」を「雄造」としている。これも真崎勇助がつけ加えたものであろう。

3 「白鳥雄蔵種痘之書」

白鳥雄蔵種痘之書

松前中川五郎治ヨリ伝授

白鳥 雄蔵

牛痘一粒ニテ三十人位ニ種ナリ人痘ハ
十四五人ナリ牛痘ハ三年程貯保ナリ人
痘ハ卅日斗貯保也

牛痘ハ牝牛乳ニ發生スルモノ上品トス
其色ハ鉛色シ青キ方ヨロシ既ニ灌濃ナ
ランヌル時ハ圭也

脚ノ辺ヨリ取モ宜
牛痘ノ取方ハ夏ハ八日目冬ハ九日目ハ
ヨロシ最モ牛痘種タル所ノ臂腕ヨリ其
張大ニシテ尤上品ナルトコロヲ取用ユ
也

牛へ種ユルトキハ足
ノ方へ発スルモノア
リ人痘牛痘ニヨラス
下部ハヨロシ
極秘ノ伝有寒水者不

變腐依用之也

水ノ伝

水ノ仕法種々有トイヘトモ不可感只水熱ヲ去リ和ケテ心経エ通微セシムルノ

他ナシ

水ヲ貯フルニワトク

リ入ヨリ口張シテ氣

ノモレサルヨウニシ

土中ヘウメ置ナリ尤

水氣アル土地ヨロシ

牛痘種貯伝

荒炭ヲ細カニクタクキ紅木綿ノ袋ニ入硝

子ノ盤ニ受タル牛痘ヲ一枚ノ硝子盤ヲ

以テ蓋シ其二枚合せタルヲ密臘ニテシ

カト封シ右ノ袋ノ内ニ入一両日ネセ置

ナリ

最生種ニテ用ユルモ暑中ハ生種ナ

レバ早ク腐損スル也

牛乳ヲ取用法

牝牛ノ子有ヲ味嚙一貫目程汁ニイタシ

一兩日ニ飲セシメ子牛ヲ別ニ養置テ牝

牛ノ乳ヲ麻糸ニテシカトククリ置後乳

ノタマリタル時子牛ニ少々乳ヲフクマ

セ其子牛ヲヨケテ乳ヲ取ヘシ其取時下

ニ瀬戸ノ井ヨウモノヲ置テ乳ヲ其器

エシホリ受ル也

乳ノシホルトキ麻糸

ヲ解ハ牛ニ含マシム

レハ乳出ルナリ其ノ

時小牛ヲ又別養乳シ

ホリ取也

牛乳不變之法

乳ヲ長ク貯ルニハ硝

子ノフラスコヘ入口

ヲ松脂ニテ封シ座舖

ノエノ下ニウツメ置

トキハ炎暑ニテモ卅

日斗保ナリ。

又乳ヲ取テ煎ス火

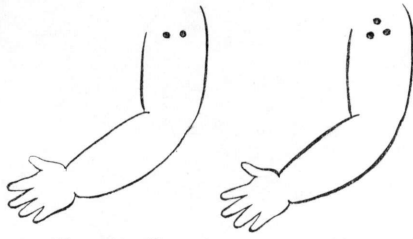
上ニテアワノタツト

キ其アワヲ去リ緒ニ

テコシ貯也

牛乳ヤ、モスレハ腐損スルモノナレハ

是ヲ貯ニ法アリ先ツ乳ヲ取即座ニ土瓶



或ハ鉄鍋ニテ煎シ上品ナル所ヲ取硝子
ノフラスコニ入置キ夏ハ最変シ易シ故
ニ時々冷水ニ其フラスコノ底ヲ入ヒヤ
ス也凡十四五日ハ保ツベシ

流行ハシカ妙法

小兒初熱ノ時カROME一匁白砂糖十匁辰
砂五分和シ服セシムルコトヨロシ併シ
種痘順法ノモノハ不用シテ宜
一度ニ五分可用

種痘仕様

男子ハ左ノ腕肩ノ骨上ヨリ下式寸余鼎
足ニ種ヘシ凶ハ上ニ記ス一歳ノ児ハ一
ツ種ヘシ其訳ハ氣分盛ナルモノニハ鼎
足ヘシ百日位ノ児ハ一ツニテ宜ニ歳三
歳トイヘトモ能々強柔ヲ見ニ種ヘシ又
痘種テ八九日ニシテ発点セサルモノハ
湯ニ浴サシメテ見ヘシ浴シテ発点ナキ
モノハ是不感キエタルモノ也又種ヘシ

女子ハ右ヘ種ヘシ

口伝

又痘ヲ種テ牛痘ニ比フコト有寒水ニ牛
乳ヲ入能煎シ土中ウツメ置ヌ痘ノ宜キ
ヲ取テ種也是百發百中也

4 おわりに

以上が「白鳥雄藏種痘之書」の全文である。種痘をする
部位及びその数、痘苗の貯藏法についてはこれで正確に判
明したわけである。

男子は左上腕、女子は右上腕に種痘をしたのである。

しかし痘苗の採取法については未だ判然としない。

「牛痘ハ牝牛乳ニ發生スルモノ上品トス」とあるのを見
れば自然發生の牛痘を用いたとも思われ、「牛痘ノ取方ハ
夏ハ八日目九日目ハヨロシ最モ牛痘種タル所ノ臂腕ヨリ其
張大ニシテ尤上品ナルトコロヲ取用ユル也」を見れば自然
發生の牛痘を人に試みて、その發痘した痘漿を用いたよう
であり、頭註の「牛ヘ種ユルトキ足ノ方ニ發スルモノアリ」
とあるのを見れば人痘を牛に植えて發痘したものをを用いた
とも解釈される。

さらに最後の項を見れば意味が釈然としない部分もあるが、非常に興味ある内容を含んでいると考えられる。

すなわち寒水と牛乳との混合液の中に人の痘漿を入れてそれをもって多人数の接種痘苗を製造したとも考えられる寒水と牛乳が培養液の役目をなしていると思われるのであるが、今日の医学的常識からは到底信じがたいものがある。しかし最後の「是百発百中也」という文句からは実用に供されて相当効果を挙げたような感じを受ける。

結論的には自然発生の牛痘は稀なものであるというから人痘を牛に種えて痘漿を得る方法がもっとも用いられたと考えられる。

牛乳について採取法、保存法たとえば味噌汁を飲ませて牛乳をとるなどの詳細な点を論じ、これが本書の半分近くを占めているのは注目に値し、これが本書の半分近くを歩いたという口碑を裏付けるものではないかと考えられる。

もちろん本書に記載されているからとて、それがみな実際に行われたことにはならない。中川五郎治が白鳥雄蔵に伝授した内容を伝える点で重要なのである。

これまで諸研究者によって報告された五郎治の種痘法と

本書記載の法との比較検討は稿を改めて論じ、本稿においては「白鳥雄蔵種痘之書」の全文を紹介するに留めておく。

擲筆するに際し、本書について種々教確を与えられた函館の阿部竜夫博士に深謝の意を表す。

註

- ① 阿部竜夫 中川五郎治と種痘伝来 無風帯社昭和十八年
- ② 筆者の調査では津軽地方にも伝えられたのではないかと思われる。

- ③ 三宅春令 補憾録 嘉永三年
- ④ 斎藤養造の門人帖については近く発表する予定である。

Summary

The name of Goroji Nakagawa (1967~1848) should be eternally memorized for his great contribution in introducing the Jenner's vaccination to Japan, and he was the first to practice the vaccination with satisfactory results.

He was not a physician, only one of the watchmen of low birth at one of the Kurile islands, which belong to U.S.S.R. presently, and he was captured by the members of the Russian fleet that had been making a voyage to Japan for the purpose of trade.

Unfortunately he was brought away unwillingly to

Siberia in 1807 (4th of Bunka), and five years passed before he could return to Japan in 1812 (9th of Bunka).

The captive Nakagawa mastered the technique and practiced it during the period when of vaccination from Russian physician the valiora had been flourishing at Hokkaido, Japan since 1824 (7th of Bunsei).

It has been mentioned that the paper described on his inoculation remained to be lost since his death, but it is found at Akita Prefectural Library in 1964.

This had been described and kept by a physician Yuzo Shiratori who had learned this technique from Nakagawa.

In this paper the method is described as such : content of pustules of the patients was injected into the cow's udder intracutaneously, and vaccine serum was extracted from eruption after eight or nine days.

This is one of the Jenner's modified method.

The paper is considered to be very valuable in knowing the method of vaccination brought about into Japan by Nakagawa.

The following each techniques are included

The method

how to prepare the vaccine for inoculation

how to sterilize water

how to preserve the vaccine for long periods

how to pasteurize milk

how to milk cows

and the details in the actual practice of inoculation.

日本医史学会例会記事

昭和四十一年度の日本医史学会例会は七月後はつぎのとおり行なわれた。

九月例会

日時 九月十七日 午後二時
場所 順天堂大学医学部五号館会議室
演題 一、アラビアの医術 前島信次氏（慶大文学部教授）
一、アラビア医学と中国医学との交流について

石原明氏（横浜市大医学部講師）

来会者氏名（敬称略）

高橋 博行 田淵 嫩 前嶋 信次 大鳥蘭三郎 岸本 頼子
久志本常孝 赤須 通美 服部 正喬 小川 鼎三 大塚 恭男
羽倉 敬尚 赤松 金芳 本間 辰雄 石原 明 杉田 暉道
六角 高雄 高木圭二郎 吉田 一郎 陳 徳本 馬場 明
鈴木 正夫

十月例会

蘭学資料研究会と共催
日時 十月十五日 午後一時半
場所 共立女子大学文芸学部会議室
演題 一、中野柳圃とその音声研究 杉本つとむ氏
一、初期来日宣教医研究序説 長門谷洋治氏
一、河口信任所蔵本 原田維祺著「蔵府凶志」

来会者氏名（敬称略）

川島恂二氏

十一月例会

日時 十一月二十六日 午後二時
場所 慶応大学医学部北里医学図書館
演題 一、ロンドンにウイリスの跡をたずねて 鮫島近二氏
一、a 田代三喜の著書集成「三帰廻翁医書」について
b 日本で最初に「脈無し病」を記載した山本鹿洲翁とその墓表について
矢数道明氏

来会者氏名（敬称略）

高橋 博行 久志本常孝 大鳥蘭三郎 福島 博 田淵 嫩
岸本 頼子 大塚 恭男 鮫島 近二 馬場 明 片桐 一男
石原 明 小川 鼎三 陳 徳本 大東 昭雄 赤松 金芳
矢数 道明

十二月例会

恒例により蘭学資料研究会との共催で例会と懇親会を開く。
日時 十二月十七日 午後二時
場所 七十七銀行ビル七階会議室
演題 一、大野升吉 その洋学とからくり 立川和二氏
一、筑前蘭学関係史料の紹介

—— 済民草書と蛮人白状解 ——

一、馬場佐十郎訳「蓮花秘訣」について 杉本 勲氏
来会者氏名（敬称略） 小川鼎三氏

本間 達雄 鳴原 英雄 片桐 一男 大鳥蘭三郎 赤松 金芳
小川 鼎三 福島 博 緒方 富雄 川島 恂二 田淵 嫩

村山 七郎 陳 徳本 馬場 明 中里 竜瑛 大東 昭雄

第二十一回国際医史学会

表記の会議が一九六八年九月二十二日から二十八日までイタリアのシエナでローマ大学の医史学研究所長であり、同時に国際医史学会会長であるパッチニ教授 Prof. A. Paccini が主宰して開かれることとなった。この会議に関する詳しい規定書は学会事務所に来ていたが、そのなかから二、三を抄出する。

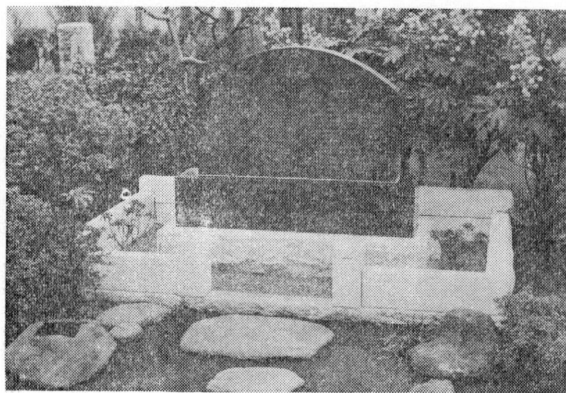
テーマ

- 一、タスカン医学
 - 二、中世における医学と美術
 - 三、イタリアと他国との医学的関係
 - 四、過去百年間の医学の発展特に病理学、病因機構、専門分科の概念等に関し
 - 五、齒科技術の発展
 - 六、その他
- 演題申込 一九六七年六月三十日まで
用語 イタリア語、英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語
会費 会員一万二千リラ 会員外一万五千リラ
参加希望者は所定の書式により申込のこと

高野長英記念碑再建成的

かねて本学会も発起者の一員として、青山善光寺境内に再建中であつた高野長英記念碑がさきほどみごとに完成した。その披露式が旧臘十二月十一日午後二時より盛大に行なわれた。この再建計画は明けて三年前にたてられ、本学会の有志の方々をはじめ、

日本医師会、東京医師会などの協議を得、またとくに地元地区の多くの篤志者からの浄財を集めることができて実を結んだのである。まことに近來にない快挙であつたが、忘れてならないのは寺側の協力もさることながら会員羽倉徹尚氏の終始かわざる尽力である。高野長英の霊も以て十分に嘖するであろうと考へる。碑は黒御影石を材とし、二段の台石の上につらえられた楕形のものである。



その正面上部に長英肖像の銅像レリーフをはめこみ、右側に日本文、左側に英文で長英の略歴、事蹟、建碑の由来を刻す。簡単な碑文ではあるが、いわゆる現代文で記してあるのは英文を併記してあるのとあいまってこの種碑文の通例を破つたもので誰にも親しみやすく、先覚者の高野長英の碑に刻む文としてまことにふさわしい。

また右の記念碑が再建されたのを機会として、高野長英の終焉の処を東京都旧跡として顕彰する碑が青山南町六丁目御子柴氏（いろは）邸にたてられた。

雜誌文籍

史料

吉木蘭齋と森鷗外

日本医事新報 二二〇七号 昭41・8・13

エイクマンの脚気伝染説

日本医事新報 二二一〇号 昭41・9・3

日本整形外科の歴史

医学のあゆみ 五九卷三九頁 昭41・10・1

蝦夷地派遣軍と壞血病

日本医事新報 二二一七号 昭41・10・22

ケンパー、ジーボルトを偲ぶ

日本医事新報 二二二六号 昭41・12・24

「脈無し病」記載の漢方医書とその著者山本鹿洲翁

日本医事新報 二二七号 昭41・12・31

隨筆

「痛みの哲学」

日本医事新報 二二〇七号 昭41・8・13

石榴花

日本医事新報 二二〇七号 昭41・8・13

岸本博士と黒色腫

日本医事新報 二二二三号 昭41・9・24

山極先生とノーベル賞

医学のあゆみ 五九卷三四一六 昭41・11・5

伝記

安倍能成先生を偲んで

日本医事新報 二二〇八号 昭41・8・20

二木謙三・村山達三両先生を偲ぶ

日本医事新報 二二二一号 昭41・9・10

土肥慶藏先生御生誕壹百年を記念して

日本医事新報 二二二二 昭41・9・17

黒沢潤三博士を偲ぶ

医学のあゆみ 五九卷四五頁、昭41・10・1

医療

川柳より見た明治時代の医療・衛生(薬剤篇3)

日本医事新報 二二二一号 昭41・11・19

川柳より見た明治時代の医療・衛生(薬剤篇4)

日本医事新報 二二二二号 昭41・11・26

川柳より見た明治時代の医療・衛生(薬剤篇5)

日本医事新報 二二二四号 昭41・12・10

川柳より見た明治時代の医療・衛生(薬剤篇6)

日本医事新報 二二二六号 昭41・12・24

川柳より見た明治時代の医療・衛生(薬剤篇7)

日本医事新報 二二二七号 昭41・12・31

雑

座談会・最近の梅毒をめぐる

緒方 富雄 竹内 勝 樋口謙太郎 落合京一郎 榎田良精

福岡 良男 松橋 直 春日 斎

日本医事新報 二二〇八号 昭41・8・20

医学概論講座の課題

医学のあゆみ 五九卷二一〇頁 昭41・10・22

白川 充

佐藤 静馬

座談会

桐沢 長徳

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

山本成之助

医家謹告

漢法処方近代化

常用漢方処方のエキス化(錠・散)に成功!

古方・後世方の漢方処方では、現在、医家の常用されるものは、ほとんど製造発売しています。

小太郎漢方エキス剤は……

- 従来、煎剤として投与していた漢方処方を、当社研究所にて真空技術による製剤化を開発し、脱水乾燥して粉末および錠剤としたものです。
 - 配合生薬をオートクレーブにより抽出し、含有成分のすべてと揮発しやすい精油成分を完全回収し、真空減圧乾燥法を行なったものです。
 - 原料生薬の品質管理および製造工程管理は、当社研究所のスタッフにより厳重になされています。
 - 漢方エキス剤は一般薬品と同様に、そのまま分包し、投与することができます。
 - 漢方エキス剤の有効成分は、常に一定に保たれております。
- 従来、漢方薬をご使用なき医家も、簡単に安心してご使用願えます。

常用量 1回 3~6 グラム 1日3回
医家向薬価 1日分約12円~15円

呈 文献・リスト

小太郎漢方製薬株式会社

本社・大阪市東区道修町2 TEL (203) 0084

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 13. No. 1

Feb. 1967

CONTENTS

Original articles

- The testimony of G. F. Verbec as to the adoption
of the German medicine at the beginning of the Meiji
era, and its historical background.....Motoo Aki...(1)
- Ethics of a doctor claimed by Shosan Suzuki
who is a bonze of Zen sect. Kido Sugita...(34)
- A letter of Ryotaku Maeno adressed to Sogen
Yoshikawa and a portrait of Hippocrates by
Tairo Ishikawa..... Kazuo Katagiri...(38)
- "Paper on vaccination" described by
Yuzo Shiratori.....Akitomo Matsuki...(54)
- Literatures**(63)
- News**(61)

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo.